

「流通手段と資本」(『資本論』第3部第28章)の草稿について : 第3部第1稿の第5章から

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

61

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

205

(終了ページ / End Page)

274

(発行年 / Year)

1993-12-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008573>

Teinosuke Otani: On the Manuscript for Chap. XXVIII of Book III of "Capital" by Karl Marx: "Means of Circulation and Capital; Views of Tooke and Fullarton"
 KEIZAI-SHIRIN (The Hosei University Economic Review), Vol.61, No.3
 Hosei University, Tokyo, Japan, 1994

「流通手段と資本」（『資本論』 第3部第28章）の草稿について

— 第3部第1稿の第5章から —

大谷 禎之介

1. はじめに

これまで、現行版『資本論』第3部の「第5篇 利子と企業者利得とへの利潤の分裂。利子生み資本。」のためにエンゲルスによって利用された、マルクスの『資本論』第3部第1稿の「第5章 利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）への利潤の分裂。利子生み資本。」についての考証的研究を続けてきた¹⁾。筆者としては、これら一連の考証作業のなかで、エンゲルス版では見えなくなっているマルクスの理論的展開の筋道を探り出す努力をしてきたつもりであり、草稿のたんなる紹介に終始してきたのではないつもりではあるが、しかし、筆者の作業が読者の多くにとってもつ最大の意義が、マルクスの草稿の内容それ自体の紹介にあったことは言うまでもない。エンゲルス版がマルクスの草稿と著しく異なっていることが次第に明らかになってきて、多くの研究者が草稿の内容に触れることを切望しているにもかかわらず、草稿を所蔵する社会史国際研究所でそのフォトコピーを閲覧することはできるにせよ、それを読みこなすのは容易ではなく、一般には簡単に近づけるものではなかったから、不十分なものであ

れ、筆者の作業もそれなりの意義をもつことができたのである。筆者の考証上の判断ないし解釈には同意されない多くの読者がこの作業の進展に期待してくださってきたのも、そのためであった。

このたび、待望の、この第5章を含む『資本論』第3部第1稿が、ようやく、MEGAの第2部第4巻第2分冊として刊行された。

こうして、原文を読むことができる研究者であれば、MEGAによって草稿がどのようになっているのかを知ることができるのであり、エンゲルス版との対比も自分で行なうことができる。筆者の日本語訳を基本とする紹介を、隔靴搔痒の思いで利用されてきた多くの研究者は、すでに、積年の憂さをはらすようにMEGAに飛びつかれていることであろう。この意味では、筆者の草稿紹介の作業の意味は大きく減退することは明らかである。けれども、膨大な付属資料を付したMEGAは、誰でもが容易に利用し読みこなすことができるというものではないし、またエンゲルス版との相違を洗い出すことも、じつはそれ自体としてかなりの煩瑣な作業を必要とするものである。草稿とエンゲルス版との相違は、いずれは、1894年刊行のエンゲルス版を収めるMEGA第2部第16巻（第2部の最終巻）の付属資料に記録されることになるが、それまでは、マルクスの草稿と現行版とを逐一突き合わせる作業をしなければならない。このように考えると、第3部第1稿が公刊されたあとも、マルクスの草稿を日本語で紹介し、かつエンゲルス版との相違を拾い上げる作業は、依然としてそれなりの意味をもちうのではないかとも思われる。

そこで、すでに以前に作業を終えていたが、内容の若干の分析を書き加えるつもりでいた第28章部分についての本稿を、これまでと同じスタイルで発表することにした²⁾。

なお、本稿の準備はすべて筆者のノートによって完了していたのであるが、発表されたMEGAのテキストの部と照合して必要な補正を行ない、またMEGAの解説と筆者の解説とが異なる場合には、そのことを注記した。また、異文についてはMEGAの付属資料の部（Apparat）に収め

られている「異文目録」を利用して訳注を補充し、さらに「注解」の訳文をパラグラフごとに付け加えた。

筆者のこの方面での作業の今後の進め方はまだ決めかねているが、第5篇の内容に関心をもたれている読者のために、エンゲルス版との相違の詳細な注記はとりあえず棚上げにして、MEGAによって第3部第1稿第5章の残っている部分、すなわち第5篇第29章～第36章に当たる部分のテキストをまとめて訳出してしまうことが有意義かとも考えている。

さて、本稿が取り扱うのは、マルクスの第3部第1稿の「第5章 利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）への利潤の分裂。利子生み資本。」のうち、エンゲルス版第3部の「第28章 流通手段と資本。トゥックとフラートンとの見解。」に利用された草稿部分であり、草稿の328-335ページにあたる。本稿でも、第3部第1稿についてのこれまでの一連の拙稿と同様のしかたで草稿の訳文を掲げ、それに草稿とエンゲルス版との相違を注記する。

エンゲルスはその序文で、「第27章と第29章とはほとんど原稿どおりでよかったが、第28章ではあちこちで配列を変えなければならなかった」と書いている。そしてじっさいここには、「原稿中のここに続く箇所は関連が理解しにくいので、次の括弧の終りまでは編者が新しく書き換えたものである」として、エンゲルスが挿入した長い注があるので、「あちこちで配列を変える」というのは、もっぱらここにかかわる程度のものであるように見える。ところが、実際は、この部分でのエンゲルスの手入れは、その量が多いだけでなく、記述の内容にかかわるようなものも見受けられる。これまでエンゲルス版を使ってきた人々にとっては、これらの手入れは見過ごすことができないものであろう。

- 1) 以下のものを参照されたい。①「「貨幣取扱資本」（『資本論』第3部第19章）の草稿について」、『経済志林』第50巻第3・4号、1983年。②「「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について（中）」、『経済志林』第

- 51 巻第 3 号, 1983 年。③ 「資本主義的生産における信用の役割」(『資本論』第 3 部第 27 章) の草稿について, 『経済志林』第 52 巻第 3・4 号, 1985 年。④ 「利子生み資本」(『資本論』第 3 部第 21 章) の草稿について, 『経済志林』第 56 巻第 3 号, 1988 年。⑤ 「利潤の分割」(『資本論』第 3 部第 22 章) の草稿について, 『経済志林』第 56 巻第 4 号, 1989 年。⑥ 「利子と企業者利得」(『資本論』第 3 部第 23 章) の草稿について, 『経済志林』第 57 巻第 1 号, 1989 年。⑦ 「資本関係の外面化」(『資本論』第 3 部第 24 章) の草稿について, 『経済志林』第 57 巻第 2 号, 1989 年。⑧ 「貨幣資本の蓄積」(『資本論』第 3 部第 26 章) の草稿について, 『経済志林』第 57 巻第 4 号, 1990 年。
- 2) 本稿の発表を引き伸ばしてきたのは, 草稿そのものの紹介に先立って, まず草稿第 5 章(エンゲルス版第 5 篇)のなかでのこの部分(エンゲルス版第 28 章)の位置にかかわる最近のいくつかの文献について触れたうえで, 次にマルクスの草稿そのものに即してこの部分での論旨を追い, 最後に, いわゆる〈流通手段の前貸と資本の前貸〉について若干の考察を加えておきたいと考えていたからであるが, 第 3 部草稿の公刊に伴って内容の練り直しが必要になったと判断し, とりあえずこれらの部分はいっさい省いて, 本文の紹介の部分だけを発表することにした。

2. 第 28 章の草稿, それとエンゲルス版との相違

本節では, 第 3 部第 28 章に用いられたマルクスの草稿を見る。これまでと同様に, 草稿からの訳文をかかげ, それに, エンゲルス版(MEW 版, また必要に応じて, エンゲルス自身の手にかかる唯一の版である 1894 年のマイスナー版——「1894 年版」と略称する——)における手入りを注記する。注記する手入れ(相違)の範囲や用いる記号類は, これまでのものと同じである。なお訳文には, 岡崎次郎氏の訳(大月書店刊の諸版)を土台として使わせていただいたが, ほとんどそのままとなっているところもあれば, 大きく手を加えたところもある。いずれにせよ訳文は, エンゲルス版との相違を示す必要に大きく制約されていることをご理解いただきたい。

草稿そのものの取り扱いおよびそれへの注記にかんする約束事は, 次の

とおりである。

注記のさいに、エンゲルス版とは異なる、草稿でのマルクスの原文をなるべく示すことを原則とする。エンゲルスの手入れは、訳文でも変更が生じるものばかりでなく、同じ意味の別の単語で置き換えた場合、文章構造の変更、括弧類の変更、なども注記する。しかし、次のようなものは煩瑣になるだけだと思われるので、原則として取らないことにする。——正書法上の変更、語順の局部的な変更、人称変化・格変化の訂正、定冠詞の削除・挿入、前置詞などの文体上の反復挿入、同じ動作名詞の -ung 形と -en 形との交換、意味にほとんど変更をもたらさない句読点の変更、語句の局部的変更、等々。

行の上などに書き込まれていることによって、あとから(といっても直後かもしれないのであるが)書き込まれたことがわかる語句は《 》で示す(これらは MEGA の異文目録に載録されているが、それと異なる部分については注のなかで触れている)。それ以外のマルクスによる異文は、MEGA の異文目録によって、訳注に〔手稿異文〕として注記した。そのさい、「A ← B ← C」は、草稿で A となっている部分は、B を訂正したものであり、B はさらにまた C を訂正したものであることを示し、抹消部分については、その旨を記載した。

{ } はマルクスによる角括弧、[] は筆者の挿入である。下線による強調は、とくに注記しないかぎり、すべてマルクスの草稿における、1 本の下線による強調である。エンゲルス版では、この強調は原則として省かれた。エンゲルス版で強調されている部分(1894 年版では、隔字体、MEW 版ではイタリック体)は、そのつど、注記する。

マルクス自身の注は、筆者の注と区別できるようにするため、その注番号をゴシック体にし、またそのまえに【原注】と記す。

草稿ページは次の記号で示す。ここでの数字および語句はもちろん例示のためのものである。

| 326 | Es... ここから 326 ページが始まる。

- /326/ Es... ここから 326 ページの途中のある部分が始まる。
 ...so | ここまでのページが終わる。
 ...so / ページの途中でいったん切れることを示す。つまり、このページにはさらに別のなんらかの記述があることを示す。

MEGA のテキストの部では、本稿に収めた部分は 505 ページ 3 行目から 519 ページ 10 行目、および、519 ページ 26 行目から 520 ページ 13 行目までの 2 箇所であるが、このページはその最初に 505 のように記した。ただし、原注については、ページを記載しなかったが、本文のなかの注番号のあるページの下部（次ページの下部に続けられている場合もある）に脚注として収められている。

ページの変わり目が文の途中である場合には、あとのページの最初の語の直前をその変わり目とみなす。

注のなかでは、草稿とエンゲルス版との相違は、草稿訳文の該当部分をまず掲げ、次にそれがエンゲルス版でどのようになっているかを記す、というしかたで示す。すなわち、「A → B」は、草稿中の A がエンゲルス版では B に変えられていることを示し、「A——削除」は、草稿中の A がエンゲルス版では削除されていることを、「挿入——A」は、エンゲルス版ではここに A が挿入されていることを示す。意味の変化をもたらさない語句の変更（外国語のドイツ語への変更、文体上の統一や改善——とエンゲルスには思われたもの——のための変更、等々）については、誤解が生じないかぎり、訳文中の訳語の直後に原語を〔 〕に入れて示した（このような場合でなくても、原語を示したほうが良いと判断した場合には、それを〔 〕に入れて示している）。場合によっては、注のなかで、訳語を掲げたあとに、原語で「A → B」とする仕方でも示した。これらの変更の記載は、煩瑣をさけるために、網羅的ではなく適宜取捨選択してある。

MEGA の「注解〔Anmerkung〕」は、該当箇所の最初のところに丸付き数字をつけ、訳者注の前に訳出した。

なお、「貨幣資本」ないし「貨幣資本家」の原語が monied capital ないし monied capitalist である場合には、必ずそれを〔 〕に入れて示しているので、この語がない場合には、原語は Geldcapital ないし Geld-capitalist となっているわけである。

- 1) 草稿 328 ページ上半の、現行版第 27 章相当部分が終わったところで、約 2 行分の行間に横線が引かれている。
- 2) 挿入——「第 28 章 流通手段と資本。トゥックとフラートンとの見解」（表題）

①トゥック¹⁾、ウィルスン、等々²⁾がしている、Circulation³⁾ と資本との区別はそしてこの区別をするさいに、鑄貨としての流通手段と、貨幣と、貨幣資本と、利子生み資本（⁴⁾ 英語の意味での moneyed Capital）⁴⁾ とのあいだの諸区別⁵⁾ が、乱雑に混同される〔 〕⁶⁾、次の二つのことに帰着する。——

①〔注解〕〔MEGA, II/4.2,〕472 ページ 24-31 行を見よ。〔この箇所は、第 5 篇第 25 章にあたる部分（MEW, Bd.25, S.417）で、トゥックからの二つの引用が収められているマルクスの次の原注を指している。——「『銀行業者の業務は二様のものである。すなわち、第 1 に、資本を直接に運用できない人びとからそれを集めて、それを運用する人びとに分配し移転することである。これは資本の流通である。もうひとつの部門は、彼らの顧客の所得から預金を受け入れ、顧客が消費の対象に支出するのに或る金額を必要とするときにそれを払い出すことである。これは通貨の流通である。』（トゥック『通貨原理の研究……』、第 2 版、ロンドン、1844 年、36 ページ。）「一方は、一面では資本の集中、多面ではその分配であり、他方は、それぞれの地方の地方的目的のための流通の管理である。」（同前、37 ページ。）」（拙稿「『信用と架空資本』（『資本論』第 3 部第 25 章）の草稿について（中）」、『経済志林』第 51 巻第 3 号、16 ページ、所収。）〕

- 1) エンゲルス版では、ここに、長い注がはいっている。それは、現行版（MEW 版）では、次のようになっている。——

「これに関連するトゥックからの引用は 390 ページではドイツ語の抜き書きで引用したが、それをここでは原文で挙げておこう。„The business of bankers, setting aside the issue of promissory notes payable on demand, may be divided into two branches, corresponding with the distinction

pointed out by Dr. (Adam) Smith of the transactions between dealers and dealers, and between dealers and consumers. One branch of the banker's business is to collect capital from those who have not immediate employment for it, and to distribute or transfer it to those who have. The other branch is to receive deposits of the income of their customers, and to pay out the amount, as it is wanted for expenditure by the latter in the objects of their consumption ... the former being a circulation of capital, the latter of currency." (Tooke, „Inquiry into the Currency Principle“, p.36.) 前者は „the concentration of capital on the one hand and the distribution of it on the other“ であり、後者は „administering the circulation for local purposes of the district“ である (ibid. p.37.)。——正しい見解にはるかに近づいているのは、次の箇所でのキニアである。「貨幣は、2つの根本的に違う操作を行なうために使用される。商人どうしのあいだでの交換の媒介物としては、貨幣は資本の移転が行なわれるのに役立つ用具である。すなわち、貨幣での一定額の資本と商品での同額の資本との交換である。しかし、労賃の支払や商人たちと消費者たちとのあいだの売買に用いられる貨幣は、資本ではなく、収入である。すなわち、社会の収入のうち、日常の支出に向けられる部分である。この貨幣は不断の日常的使用のなかで流通している。そして、ただこれだけが、厳密な妥当性をもって Currency と呼ぶことのできるものである。資本の前貸はまったく銀行やその他の資本所有者の意志にかかっている、——というのは、借り手はいつでも見つかるからである。ところが、currencyの額は、貨幣が日常の支出のためにそのなかで流通している社会の必要にかかっているのである。」(J.G. Kinnear, „The Crisis and the Currency“, London 1847, [p.3,4].)

この注の最初の部分で、「これに関連するトゥックからの引用は390ページではドイツ語の抜き書きで示した」とされているが、ここでの「390」というページ番号には、「本巻、417ページを見よ」という編集者の脚注が付されている。この「417ページ」とは、エンゲルス版の第25章のなかの、トゥックからの引用のあるページである。そこでは、トゥックの著書の36ページおよび37ページからの2つの引用のあとに、「われわれは第28章でこの箇所に戻ち返る。」と書かれており、このページ指示がこの箇所についてのものであることは確かであろう。それでは、「390」という数字は、なにについてのページ番号なのであろうか。現行版ではそれについてのなんの説明もないのであるから、読者は、これは草稿のページを指しているものと考えられるかもしれない。そして、もしそのように考えるなら、当然に、この注そのものもマルクスによっ

て草稿そのもののなかに書かれているものだと考えるほかはないことになるであろう。ところが奇妙なことに、このページ指示は、1994年版では「581」、かつてのいわゆるインスティテュート版では「440f.」となっているのである。後者の「440f.」は、第25章のなかの上記の引用箇所があるインスティテュート版のページである。つまり、この数字はインスティテュート版の編集者がつけたページなのである。それでは、インスティテュート版が依拠したはずの1994年版の「581」とは、なにについてのページ番号なのであろうか。それは、まず、この1994年版そのもののページ番号ではありえない。なぜなら、1994年版の第3部は、第5篇第28章までが第1分冊、第29章以降が第2分冊となっており、前者の最後の印刷ページが448ページ、後者のページも1ページからつけられていて、その最後の印刷ページが422ページとなっているのであって、これにはそもそも581ページは存在しないのだからである。またそれがマルクスの草稿のページを指しているのではないことは、第3部第1稿の最終のページ番号が575であり、総ページ数をかぞえても580ページしかないのだからである。

じつは、1994年版の第3部第1分冊の390ページが、第25章のなかのトゥックからの引用のあるページなのである。現行版での「390ページ」という指示は、1994年版のページづけに合わせて、現行版の編集者がつけたものなのであった。それでは、その1994年版自身ではなぜ「581ページ」となっているのであろうか。ありうるのは、エンゲルスの印刷原稿で、この原稿のページを指示していたものをそのまま活字にし、組み上げられた書物のページ数に合わせて変更することを忘れたという可能性である。しかし、1994年版で、エンゲルスの序文のあとに付けられたこの版の「誤植訂正」表にも、この部分についての記載はない。しかし、いずれにせよこの数字がマルクス自身によって書かれたものでないことだけは確かである。

すでに別稿で紹介したように、エンゲルス版第25章のなかで、「われわれは第28章でこの箇所に戻る」とされているトゥックからの2つの引用は、銀行の預金についての説明の最後に、「ただ少しずつ消費しようとする収入も、銀行に預金される」という文章の最後にマルクスによって付けられた注であり、「われわれは第28章でこの箇所に戻る」という文章は、エンゲルスによるものであった(拙稿「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中))、『経済志林』、第51巻第3号、1983年、16、18ページ、および、「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(下))、『経済志林』、第51巻第4号、1984年、31ページ、参照)。このように、エンゲルスが、第25章のこの箇所と第28章とを関係づけたことから見ても、この

注での「……ページでドイツ語の抜き書きで示した」という部分がエンゲルスによるものであることは間違いのないところであろう。

さて、この注のなかの後半には、キニアからの引用が収められているが、これは、マルクスの草稿では、『銀行法委員会報告』1857年、『エコノミスト』、その他の文献からの抜萃からなる第5章5)の最後の雑録に、「資本の移転および所得の実現のための貨幣 [Money f. transfer of capital and realisation of income]」という見出しをつけて、引用されている(草稿, 385ページ, MEGA, II/4.2, S.643-644)。この見出しのもとには、この注に取り入れられているキニアの著書の3, 4ページからの引用のほか、さらに同書の5ページからの引用があり、エンゲルスはこれを第33章「信用制度下の流通手段」のなかで使っている(MEW, Bd.25, S.541)。このように、この注は、マルクスの抜萃を利用しながらエンゲルスが書いたものだと言することができる。(なお、上記のキニアからの訳文は、草稿385ページでの英文の引用によった。また、そこでの下線によるマルクスの強調を示しておいた。)

- 2) 「等々 [etc.]」→「その他 [und andre]」
- 3) circulation, Zirkulation は、言うまでもなく「流通」の意味にも、「通貨」の意味にも、さらに銀行用語ではイングランド銀行券の「流通高」の意味に用いられる。そしてこの第28章部分では、この語がこの3つの意味で自在に使われている。エンゲルス版でも Zirkulation が、同様にこれらの意味で使われているが、エンゲルスはまたしばしば、これらをドイツ語で (Zirkulationsmittel, Umlaufsmittel, Summe der Zirkulation などのように) 訳し分けてもいる。邦訳ではそれらのそれぞれに、エンゲルスの独訳によったりして、1つの訳を与えている。もちろんそのような訳し分けが不可能であるわけではないが、どちらも断定できない微妙なケースがあるほか、マルクスが意識的にこの語の両意性を生かしていると考えられるところもあるので、本稿では、草稿での circulation または Circulation を、この語のまま掲げることにする。
- 4) 「(」および「)」——削除。
- 5) 「鑄貨としての流通手段と、貨幣と、貨幣資本と、利子生み資本 (英語の意味での moneyed capital) とのあいだの諸区別 [d. Unterschiede zwischen Circulationsmittel als Münze, Geld, Geldcapital u. Zinstragendem Capital (moneyed capital im englischen Sinn)]」→「貨幣としての、貨幣資本一般としての、利子生み資本 (英語の意味での moneyed capital) としての流通手段 [die Unterschiede zwischen Zirkulationsmittel als Geld, als Geldkapital überhaupt, und als zinstragendes Kapital (moneyed capi-

tal im englischen Sinn))」

6) 「〔 〕」→「のであるが、」

506 I)¹⁾ 収入の支出²⁾ を媒介し、したがって個人的消費者と小売商人——この範疇には消費者（生産的消費者すなわち生産者とは区別される個人的消費者）に売るすべての商人を含めることができる——とのあいだの交易³⁾ を媒介するかぎりでの、鑄貨⁴⁾（貨幣）の Circulation I⁵⁾。ここでは貨幣は、たえず資本を補填する⁶⁾ とはいえ、鑄貨の機能において流通する。そして、⁷⁾ 一国の⁸⁾ 貨幣のうちの或る部分は、総流通貨幣のうちこの分量をなしている構成部分はたえず入れ替わるにせよ⁹⁾、いつでもこの機能に当てられているのである。これに反して、購買手段（流通手段）としてであろうと、支払手段としてであろうと、貨幣が資本の移転¹⁰⁾ を媒介するかぎりでは、この貨幣は資本¹¹⁾ である。この区別に従えば¹²⁾、この貨幣を鑄貨から区別するものは、購買手段としての機能でもなければ支払手段としての機能でもない。というのは、商人と商人とのあいだでも、彼らが互いに現金で¹³⁾ 買い合うかぎりでは貨幣は購買手段として機能する¹⁴⁾ ことができるし、また¹⁵⁾ 商人たちと消費者たちとのあいだでも、信用が与えられて収入が《まず》消費されてからあとで支払が行なわれるかぎりでは、支払手段として働くことができるからである。だから区別は、第2の場合にはこの貨幣が一方の側（売り手）のために資本を補填するだけではなく、他方の側（買い手）によっても資本として支出され¹⁶⁾ るという区別である。つまり区別は、実際には、収入の貨幣形態¹⁷⁾ と資本の貨幣形態¹⁸⁾ との区別であって、Circulation と資本とのあいだの¹⁹⁾ 区別ではない。というのは、貨幣の一定の部分が、第1の機能においてとまったく同様に、商人どうしのあいだの媒介物として流通しているのだからである²⁰⁾。ところが、²¹⁾ 次のことによってさまざまな種類の混乱がはいてくる。——²²⁾ a)²³⁾ 機能上の諸規定の混同によって、b)²⁴⁾ この2つの異なった機能における²⁵⁾ 流通する貨幣の量に関する問題の混入によって、c)²⁶⁾ 2つの機能で流通する、したがってまた再生産過程の2つの部面で

流通する通貨〔Currencies〕の分量²⁷⁾の相互間の相対的な割合に関する問題²⁸⁾。²⁹⁾ a³⁰⁾については、貨幣は一方の形態にあれば Circulation (currency) で他方の形態にあれば資本だ、というトゥックの表現のなかにすでに混乱がある。³¹⁾ 収入の実現³²⁾のためであろうと資本の移転のためであろうと、貨幣がどちらかの機能で役立つがぎり、貨幣は売買または支払において、購買手段または支払手段として、そして広義では流通手段として機能するのである。貨幣がその支出者たちまたは受領者たち³³⁾の計算のなかでもっているそれより進んだ規定、すなわちそれが彼ら³⁴⁾にとって資本を表わすか収入を表わすかという規定は、この点では絶対になにも変えない。そして、このこともまた二重に現われる。2つの部面で流通する貨幣の種類は違うとはいえ、同じ貨幣片、たとえば1枚の5ポンド銀行券は、一方の部面から [507] 他方の部面に移って行って両方の機能をかかわるがわる行なう。これは、小売商人が自分の資本に貨幣形態を与えるには、彼が自分の買い手から受け取る鑄貨の形態による《ほかはない〔allein〕》ということだけからも必要な³⁵⁾ことである。本来の補助鑄貨はたえず小売商人〔Epicier〕の手のなかにある³⁶⁾とみなすことができる。彼は³⁷⁾釣り銭の支払のためにたえずそれを必要とし、また自分の客からたえずそれを取り戻す³⁸⁾。しかし彼はまた貨幣をも受け取る、すなわち価値尺度たる金属で造った鑄貨、つまりイギリスでならば半ソヴリン貨やソヴリン貨³⁹⁾、および銀行券、ことに小額の種類⁴⁰⁾、⁴¹⁾たとえば5ポンド券や10ポンド券⁴²⁾をも受け取るのである。これらの金⁴³⁾や銀行券を、⁴⁴⁾彼は毎日⁴⁵⁾、取引銀行に預金し、これをもって⁴⁶⁾自分の銀行預金への指図⁴⁷⁾によって⁴⁸⁾自分の手形⁴⁹⁾の支払をする⁵⁰⁾。しかし、同様にたえずこの同じソヴリン貨や半ソヴリン貨⁵¹⁾や銀行券が、消費者としての⁵²⁾全公衆によって、彼らの⁵³⁾収入の貨幣形態として銀行からふたたび（直接または間接に）⁵⁴⁾引き出され、こうして⁵⁵⁾たえず小売商人⁵⁶⁾の手に還流し、このようにして彼のために彼の、資本・プラス・収入、の⁵⁷⁾新たな⁵⁸⁾一部分を実現するのである。|

- 1) 「I」——削除。
- 2) 「収入の支出」——エンゲルス版でも強調されている。
- 3) 「交易」——はじめ trade と書いたのち, commerce と変更している。エンゲルス版は Verkehr としている。
- 4) 「鑄貨」——エンゲルス版では強調されている。
- 5) 「……かぎりでの, 鑄貨 (貨幣) の Circulation I [Circulation I d. Münze (Geld), so weit ...] → 「流通手段は, 一方では, ……かぎりでは, 鑄貨 (貨幣) として流通する。〔Das Zirkulationsmittel zirkuliert einerseits als Münze (Geld), soweit ...〕」
この「I」は, 上部のセリフ (横線) が右側に大きく突き出していて, ころうじて「I」と読めるか, というように書かれているものである。エンゲルスは, これを「第1に」と読んで, 「一方では」としたのかもしれない。MEGAの解説に従っておく。
- 6) 「資本を補填する」——エンゲルス版でも強調されている。
- 7) 「そして, [aber]」——削除。
- 8) 「一国の des country → in einem Lande
- 9) 「総流通貨幣のうちこの分量をなしている構成部分はたえず入れ替わるにせよ [obgleich dies Quantum aus beständig wechselnden constituent parts d. gesammten circulirenden Geldes besteht] → 「この部分をなしている個々の貨幣片はたえず入れ替わるにせよ [obgleich dieser Teil aus beständig wechselnden einzelnen Geldstücken besteht]」
- 10) 「資本の移転 [transfers v. Capital]」——エンゲルス版でも強調されている。
- 11) 「資本」——エンゲルス版でも強調されている。
- 12) 「この区別に従えば [danach]」 → 「したがって [also]」
- 13) 「現金で [mit cash]」 → 「現金と引き換えに [gegen bar]」
- 14) 「機能する functioniren → fungieren 以下, functioniren の fungieren への変更はいちいち注記しない。
- 15) 「商人たちと消費者たちと」 → 「商人と消費者と」
- 16) 挿入——「, 前貸しされ」
- 17) 「収入の貨幣形態」——エンゲルス版では強調されている。
- 18) 「資本の貨幣形態」——エンゲルス版では強調されている。
- 19) 「のあいだの [zwischen]」 → 「の [von]」
- 20) 「貨幣の一定の部分が, 第1の機能においてとまったく同様に, 商人どうしのあいだの媒介物として流通しているのだからである」 → 「商人どうしのあ

いだの媒介物としても消費者と商人とのあいだの媒介物としても、貨幣の量的に一定の部分が流通しているのであり、したがって貨幣はどちらの機能にあっても等しく Zirkulation なのだからである(手稿では、「まったく同様

に [ebenso wohl]」の部分が、誤って ebenso sowohl となっている。)

- 21) 挿入——「トゥックの見解では」
- 22) エンゲルス版では、ここで改行されている。
- 23) 「a)」→「1.」(1994年版では「1」となっている。)
- 24) 「b)」→「2.」(1994年版では「2」となっている。)
- 25) 「この2つの異なった機能における (in d. beiden verschiedenen Functionen)」→「どちらの機能にあるものもひっくるめての (in beiden Funktionen zusammengenommen)」
- 26) 「c)」→「3.」(1994年版では「3」となっている。)
- 27) 「通貨の分量」——Quantis v. Currencies → Mengen von Umlaufmitteln
- 28) 挿入——「の混入によって」
- 29) エンゲルス版では、ここで改行されている。
- 30) 「a)」→「1」
- 31) 「a については、貨幣は一方の形態にあれば Circulation (currency) で他方の形態にあれば資本だ、というトゥックの表現のなかにすでに混乱がある。」→「a について。貨幣は一方の形態にあれば Circulation (currency) で他方の形態にあれば資本だ、という機能上の諸規定の混同。」(1994年版では、「a について」のあとは、コンマになっている。)
- 32) 「収入の」——d. Revenü → von Revenue
- 33) 「支出者たちまたは受領者たち」→「支出者または受領者」
- 34) 「彼ら」→「彼」
- 35) 「必要な [nöthig]」→「避けられない」
- 36) 「たえず小売商人 [Epicier] の手のなかにある」→「その流通重心を小売商業の領域にもっている」
- 37) 「彼は」→「小売商人は」
- 38) 「取り戻す [erhält ... retournirt]」→「受ける支払で取り返す [erhält ... in Zahlung ... zurück]」
- 39) 「半ソヴリン貨やソヴリン貨」→「ポンド貨」
- 40) 「小額の種類銀行券 [niedrigere Descriptions of banknotes]」→「小額券 [niedrige Beträge]」
- 41) 挿入——「つまり [also]」

- 42) 挿入——「さえ」
- 43) 「金」→「金貨 [Goldstücke]」
- 44) 挿入——「余っていれば補助鋳貨をも」
- 45) 挿入——「または毎週」
- 46) 「(」→「, つまり」
- 47) 「指図」——Weisung → Anweisung
- 48) 「)」——削除。
- 49) 「手形」→「仕入れ」
- 50) 「支払をする」——手稿では zahle となっているが、エンゲルス版でのように zahlt とあるべきところである。
- 51) 「ソヴリン貨や半ソヴリン貨」→「金貨」
- 52) 挿入——「資格での」
- 53) 「彼らの」→「全公衆の」
- 54) 「(直接または間接に)」→「直接または間接に (たとえば小額貨幣が賃銀支払のために工場主たちによって)」
- 55) 「こうして [so]」——削除。
- 56) 「小売商人 [Epicier]」→「小売商人たち [Kleinhändler]」
- 57) 「彼のために彼の, 資本・プラス・収入, の」→「彼らのために彼らの資本の, しかしまた同時に彼らの収入の」
- 58) 「新たな」——削除。

1329 上¹⁾ (2)最後の事実は重要なのであって、トゥックがまったく見落としているものである。貨幣が³⁾ 貨幣資本として投下されるときのみ、すなわち過程⁴⁾ の発端でのみ⁵⁾、資本価値は資本価値として存在する。商品には、資本・プラス・剰余 [Surplus] [が含まれており], したがって、それに合体された収入源泉を伴っているのである。^{6) 7)}

- 1) エンゲルス版ではここで改行されておらず、このパラグラフの前後のパーレンを取り去っている。
- 2) 挿入——「この」
- 3) 「貨幣が」——es → das Geld
- 4) 「過程」→「再生産過程」
- 5) 挿入——「(第2部第1篇)」
- 6) 「商品には、資本・プラス・剰余 [Surplus] [が含まれており], したがって

て、それに合体された収入源泉を伴っているのである。」→「というのは、生産された商品には、資本が含まれているだけではなく、すでに剰余価値も含まれているからである。その商品は、資本自体であるだけではなく、すでに生成した資本であり、それに合体された収入源泉といっしょになっている資本である。」

- 7) 挿入——「だから、小売商人が自分の手に還流してくる貨幣と引き換えに手放すもの、すなわち彼の商品は、彼にとっては、資本・プラス・利潤、資本・プラス・収入なのである。」

しかし第2に¹⁾、小売商人〔Epicier〕自身にとっては、通貨〔currency〕は彼の資本を補填するのであり、彼の資本の貨幣形態を表わす²⁾のだからである。

1) 「第2に」→「さらに」

- 2) 「小売商人〔Epicier〕自身にとっては、通貨〔currency〕は彼の資本を補填するのであり、彼の資本の貨幣形態を表わすのだから〔ja〕」→「流通する貨幣は、小売商人の手に還流することによって、彼の資本の貨幣形態を回復させる」

¹⁾ 収入の Circulation としての Circulation と資本の²⁾ Circulation としての Circulation との区別を、Circulation と資本との区別にしてしまうのは、愚にもつかないこと³⁾である。このたわごと⁴⁾は、トゥックが⁵⁾まさに、銀行券を発行する発券銀行業者⁶⁾の立場に立っていることからきているものである。彼の銀行券のうち、(いつでも⁷⁾別の銀行券〔である〕⁸⁾とはいえ) たえず公衆の金庫やポケット⁹⁾のなかにあり、¹⁰⁾ 流通手段として機能している¹¹⁾部分¹²⁾は、彼にとって¹³⁾紙と印刷とのほかにはなんの費用もかからない。それは、彼あての¹⁴⁾流通する債務証券(手形)であるが、それが彼の手に貨幣をもたらし、したがって彼の資本の増殖の手段として役立つ¹⁵⁾。しかしそれは、彼の資本(彼自身の資本または借り入れた資本)¹⁶⁾とは異なるものである。そこから、彼にとっては Circulation と資本との区別¹⁷⁾が生じるのであって、¹⁸⁾ この区別は諸概念規定¹⁹⁾と

はなんの関係もないのであり、当のトゥック自身によってなされた概念規定とはまったく関係がない²⁰⁾のである。

- 1) 挿入——「だから [also]」
- 2) 「資本の」——d. Capitals → von Kapital
- 3) 「愚にもつかないこと [Unsinn]」→「まったくまちがい [durchaus verkehrt]」
- 4) 「たわごと [Jargon]」→「言い方 [Redeweise]」
- 5) 「トゥックが」→「トゥックの場合には、彼が」
- 6) 「発券銀行業者 [d. issuing banker]」→「銀行業者」
- 7) 「いつでも」immer → stets
- 8) 「[である]」→「から成っている」
- 9) 「金庫やポケット」→「手」
- 10) 挿入——「また」
- 11) [手稿異文]「機能している [functionirt]」←「流通する [circulir[t]]」
- 12) 「部分」→「額」
- 13) 「彼にとって」ihn → ihm
- 14) 「彼あての」→「彼自身あてに振り出された」
- 15) 「手段として役立つ」——この部分は、als ein Mittel ... bilden となっているが、エンゲルス版でのように、als をそのままにして、bilden を dienen に変える（「手段として役立つ」）か、あるいは、als を取り去る（「手段をなす」）か、どちらかでなければならない。（MEGA では、als を削除し、その旨を訂正目録に記載している。）
- 16) 「彼の資本（彼自身の資本または借り入れた資本 [s. eignen od. gepumpten]）」→「彼自身の資本であろうと、借り入れた資本であろうと、彼の資本」
- 17) 「区別 [d. Unterschied]」→「1 つの独自の区別 [ein spezieller Unterschied]」
- 18) 挿入——「しかし」
- 19) 挿入——「そのもの」
- 20) 「まったく……ない」——am wenigsten とあるべきところが、誤って am wenigstens となっている。

規定性の相違——収入の貨幣形態として機能するのか、それとも資本の貨幣形態として機能するのか、という相違——は、さしあたり¹⁾、流通手

段としての貨幣の性格を少しも変えるものではない、——貨幣がどちらの機能を果たそうと²⁾。たしかにこの相違は³⁾、貨幣は一方の規定では⁴⁾より多く本来の流通手段(鑄貨、購買手段)として機能する、という違いをもたらすと言える⁵⁾。なぜなら、この売買は分散して行なわれるからであり、また収入を支出する人々の多数⁶⁾を占める労働者は相対的にわずかしか信用で買うことができ⁵⁰⁸きないからである。他方、⁷⁾商業界⁸⁾では、一部は集中によって、一部は優勢な信用制度⁹⁾によって、貨幣はおもに支払手段として機能する。しかし、支払手段としての貨幣と購買手段(流通手段)としての貨幣との区別は、貨幣¹⁰⁾に属する区別であって、貨幣と資本との区別ではない。小売商業では〔im kleinen Retail〕より多く銅や銀が流通し、卸売商業では〔im grossen〕より多く金が流通しているからといって、¹¹⁾一方での金と他方での銀や銅との区別は、Circulationと資本との区別ではないのである。

1) 「さしあたり」——d'abord → zunächst

2) 挿入——「貨幣はこの性格を保持しているのである」

3) 「この相違は」——削除。

4) 「一方の規定では」→「収入の貨幣形態として現われる場合には」

5) 「、という違いをもたらすと言える」——削除。

6) 「多数」Majorität → Mehrzahl

7) 挿入——「流通手段が資本の貨幣形態である」

8) 挿入——「での交易」

9) 「信用制度」——Kreditwesen → Kreditsystem

10) 挿入——「そのもの」

11) [手稿異文]ここに、「貨幣は〔……〕代表する」と書いたのち、消している。

b¹⁾ について。²⁾ 貨幣が流通しているかぎりでは、購買手段としてであろうと支払手段としてであろうと——また、³⁾ 2つの部面のどちらであろうと⁴⁾、またその機能が収入の、それとも資本の金化ないし銀化⁵⁾であるのかにまったく⁶⁾ かわりなく——、貨幣の流通する総量の量について

ては、^①以前に単純な商品流通を考察したときに⁷⁾展開した諸法則があてはまる。流通速度、つまりある一定の期間に同じ貨幣片が購買手段および支払手段として行なう同じ諸機能⁸⁾の反復《回数》、同時に行なわれる売買、⁹⁾支払の総量、流通する商品の価格総額、最後に同じ時に決済されるべき支払差額、これらのものが、どちらの場合にも、流通する貨幣の総量、通貨〔currency〕の総量を規定している。このような機能をする貨幣がその支払者¹⁰⁾または受領者にとって資本を表わしているか収入を表わしているかは、¹¹⁾ここでは¹²⁾事柄をまったく変えない。流通する貨幣の総量は¹³⁾購買¹⁴⁾手段および支払手段としての貨幣の機能によって規定されて〔いる〕¹⁵⁾のである。

①〔注解〕カール・マルクス『経済学批判。第1分冊』、ベルリン、1859年、81-85ページ、124-125ページ、127-128ページ（MEGA, II/2, S.170-174, 206/207 und 209）。

1) 「b」→「2」

2) 挿入——「両方の機能でいっしょに流通している貨幣の量に関する問題の混入。」

3) 「また、」——削除。

4) 挿入——「同じことであり〔einerlei〕」

5) 「金化ないし銀化」→「実現」

6) 「まったく」——削除。

7) 挿入——「第1部第3章第2節bで」

8) 「諸機能」→「機能」

9) 挿入——「ないし」

10) 「支払者」——Ausgeber → Zahler

11) 挿入——「どちらでもかまわないのであり、」

12) 「ここでは」——削除。

13) 挿入——「簡単に」

14)〔手稿異文〕「購買」←「貨幣」

15) 「されて〔いる〕」→「される」

c) について。²⁾ 2つの流通部面には内的な関連がある（³⁾ というのは、

一方では支出されうる収入の総量が消費の総量⁴⁾を表現しており、⁵⁾ 商業および生産⁶⁾で流通する資本総量の規模⁷⁾が事業一般の景況、⁸⁾ 再生産過程の規模と速度とを表現しているからである）にもかかわらず、⁹⁾ 同じ事情が、2つの機能で、または2つの部面で¹⁰⁾ 流通する貨幣総量の量に、またはイギリス人が通貨〔currency〕を銀行用語化して言う¹¹⁾ ところによれば、Circulationの量に、違った作用をするのであり、また反対の方向にさえも作用する。そしてこのことが、トゥックによる Circulation と資本とのばかげた¹²⁾ 区別に新たなきっかけを与えているのである。⁽¹³⁾ ①通貨説〔currency theory〕の奴らが2つのまったく別の事柄を混同しているという事情は、これらの事柄を概念の区別として示すのに足りるだけの十分な理由ではけってない。¹³⁾

- ①〔注解〕「通貨説」（「通貨原理」）は、1825年の恐慌で始まった、必然的に周期的に反復される恐慌循環にたいするブルジョア経済学の一つの反応であった。「通貨説」の代表者たちは、リカードウの貨幣数量説を直接に引き継ぎ、これを一種の貨幣的景気理論に仕立てあげた。彼らは、ある大きさの基本額を除いて銀行券の発行を、イングランド銀行の貨幣金属準備の額に、したがって本位金属の国際的流出入に結合することを要求したのであって、この要求は、1844年のイギリスの銀行立法で実際に押し通された。このようにすることでそれぞれの銀行券がその額面の言い表しているのと同量の貨幣金属をつねに代表しているということが達成されるのだ、と主張されただけではなかった。実際に銀行券流通は、リカードウが採用した純粋金属流通の諸法則に従わせられたのである。リカードウは、本位金属の輸出入を、貨幣価値と物価とをつねに繰り返して急速にそれらの正常な水準に引き戻す経済的過程だとみなしていた。循環的發展と結びついた物価の騰落は、通貨理論の代表者たちにとっては、恐慌を引き起こす決定的原因そのものであって、彼らは自分たちの貨幣・金融政策を恐慌回避のための有効な手段として採用するよう勧めたのである。「通貨説」の代表者たちは、銀行券の信用貨幣としての性格を否定し、そのことによって、銀行券の発行によって条件づけられた還流を——それが過剰な銀行券発行を妨げ、高い程度で銀行券の価値の安定性を保証するものであるのに——否定した。「通貨説」の実践的適用は、銀行券流通の人為的な制限をもたらし、恐慌を激化させるように作用した。

「通貨説」は、貨幣を窮屈にして金利を高くするという政策によって産業資本家の負担で高い利潤を達成しようとした保守的な貨幣資本家の利益に相応しいものであった。

- 1) 「c」→「3」
- 2) 挿入——「2つの機能で流通する、したがってまた再生産過程の二つの面で流通する流通手段の相対的な割合に関する問題について。」
- 3) 「(」→「。」
- 4) 「総量 [Masse]」→「規模 [Umfang]」
- 5) 挿入——「他方では、」
- 6) 「商業および生産」→「生産および商業」
- 7) 「規模 [Umfang]」→「大きさ [Größe]」
- 8) 「事業一般の景況 [d. Stand d. Geschäfts überhaupt],」——削除。
- 9) 「)」にもかかわらず,」→「。それにもかかわらず,」
- 10) 「2つの機能で、または2つの側面で」→「2つの機能または側面で」
- 11) 「通貨 [currency] を銀行用語化して言う [bankisirt nennen]」→「これを銀行業者風に言い表わす [dies bankmäßig ausdrücken]」
- 12) 「ばかげた」——blödsinnig → abgeschmackt
- 13) 「(」および「)」——削除。

繁栄期——すなわち再生産過程が非常に膨張し速度を増し¹⁾ 活気にあふれている時期——には、労働者は完全に就業している⁽²⁾ たいていは賃銀の上昇も現われて、商業循環上の他の諸時期に賃銀が水準³⁾ 以下に下がるのを⁴⁾ 埋め合わせる⁵⁾。そのほか⁶⁾, ⁷⁾ 収入は大きくなり,⁸⁾ 消費は⁹⁾ 増加する。この局面はまた、さまざまな部門での価格の上昇をも伴う、等々¹⁰⁾ (それに加えて、輸入関税の 509 支払のための現金支出が増大する、等々)¹¹⁾。¹²⁾ 通貨 [currency]¹³⁾ の分量は、ある 限界のなかでは、増大する。ある限界のなかでと言うのは、流通速度の増大が通貨 [currency]¹⁴⁾ の総量の増大を制限する¹⁵⁾ からである。¹⁶⁾ 収入のうちの労賃から成っている部分がつねに¹⁷⁾、最初は¹⁸⁾ 可変資本の形態で、しかもこれはもちろん¹⁹⁾ 貨幣形態で、前貸しされるかぎり²⁰⁾、資本のうちのこの部分は、繁栄期には、その Circulation のためにより多くの貨幣を必要とする。しかし第 1 に²¹⁾、われわれはこの貨幣を、||330 上| 一度は可変資本の Circula-

tionに必要な貨幣として、第2に²²⁾労働者の収入のCirculationに必要な貨幣として、というように2度計算してはならない。後者の貨幣²³⁾は、小売取引²⁴⁾で支出され、1週間ごとに(おおよそのところ)²⁵⁾小売商人²⁶⁾の預金として銀行業者²⁷⁾に帰ってくるが、しかし²⁸⁾それはその²⁹⁾比較的小さいもろもろの循環を描きながらさらにあらゆる種類の間取引³⁰⁾を媒介したのちのことである。繁栄期には生産的資本家³¹⁾にとって貨幣での還流³²⁾は順調であり³³⁾、したがって貨幣融通³⁴⁾にたいする彼らの要求は、彼らがより多くの労賃を支払わなければならない、彼らの可変資本の流通のためにより多くの貨幣を必要とするということによっては、増大しない。³⁵⁾

- 1) 「速度を増し」——Rapidität → Beschleunigung
- 2) 「(」→「。」
- 3) 「水準」→「平均水準」
- 4) 挿入——「いくらか」
- 5) 「)」——削除。
- 6) 「そのほか」→「同時に」
- 7) 挿入——「資本家の」
- 8) 「なり、」→「なる。」
- 9) 挿入——「一般的に」
- 10) 「この局面はまた、さまざまな部門での価格の上昇をも伴う、等々」→「商品価格もやはり通例は上がる。少なくともいくつかの決定的な事業部門では上がる」
- 11) 「(それに加えて、輸入関税の支払のための現金支出が増大する、等々)」——削除。
- 12) 挿入——「その結果、」
- 13) 「通貨 [currency]」→「流通する貨幣 [das zirkulierende Geld]」
- 14) 「通貨 [currency]」→「流通する手段 [das umlaufende Mittel]」
- 15) 「増大を制限する」——d. Wachsen limitirt → dem Wachsen Schranken setzt
- 16) 挿入——「社会的」
- 17) 「つねに」——削除。
- 18) 挿入——「産業資本家によって」

- 19) 「これはもちろん」→「いつでも」
- 20) 「かぎり」→「ので」
- 21) 「第1に」——削除。この語は、すぐ次にでてくる「第2に」に対応するものであるが、マルクスの文章では、このあとさらに「一度は」という語が重ねて書かれているので、エンゲルスはこの「一度は」のほうを生かし、「第1に」を削ったのである。
- 22) 「第2に」→「次にもう一度」
- 23) 「後者の貨幣」→「労働者に賃銀として支払われる貨幣」
- 24) 「小売取引」——Detailverkehr → Kleinverkehr
- 25) 「1週間ごとに (おおよそのところ (more or less))」→「ほぼ (so ziemlich) 1週間ごとに」
- 26) 「小売商人」——shopkeepers → Kleinhändler
- 27) 「銀行業者」→「銀行」
- 28) 「しかし [jedoch]」——削除。
- 29) 「そのの」——削除。
- 30) 「中間取引」——Zwischentransaktionen → Zwischengeschäfte
- 31) 「生産的資本家」→「産業資本家」
- 32) 「貨幣での還流 (Returns in Geld)」→「貨幣の還流 (Rückfluß des Geldes)」
- 33) 「順調であり [easy]」→「順調に行なわれるのであり [sich glatt abwickelt]」
- 34) 「貨幣融通」——monetary accommodation → Geldakkommodation
- 35) エンゲルス版ではこのあとに、改行して次の一文が書き加えられている。
——「総括的な結果は、繁栄期には収入の支出に役立つ流通手段の量が決定的に増大するということである。」

ところで、同じ繁栄期において、¹⁾ 諸資本²⁾ の移転のために必要な、したがって純粋に³⁾ 資本家たち自身のあいだ⁴⁾ で行なわれる⁵⁾ Circulation について《言えば、これ⁶⁾ は、同時に信用が最も弾力的で最も容易な時期でもある。この Circulation⁷⁾ の速度は直接に信用によって調節され、したがって、諸支払の決済のために必要な Circulation⁸⁾ の総量は (9) あるいは¹⁰⁾ 現金売買¹¹⁾ のために必要なそれさえも)、相対的には減少する。それは絶対的には膨張するかもしれないが、しかし、いずれにせよ相対的

には、つまり再生産過程の膨張に比べれば、減少する。一方ではより大量の支払¹²⁾が貨幣のいっさいの介入なしに清算される。他方では、過程の盛んな活気のために、同じ貨幣分量が、購買手段¹³⁾としての機能において¹⁴⁾も支払手段としての機能において¹⁵⁾も、より速く運動するようになる。より多くの異なった諸資本の¹⁶⁾還流〔returns〕が、同じ貨幣額によって媒介される¹⁷⁾。

- 1) 「同じ繁栄期において、」——削除。
- 2) 「諸資本」→「資本」
- 3) 「純粹に」——削除。
- 4) 挿入——「だけ」
- 5) 「行なわれる」→「必要な」
- 6) 「これ」→「この好況期」
- 7) 「この Circulation」→「資本家と資本家との Circulation」
- 8) 「dieselbe [=Circulation]」→「流通手段」
- 9) 「(」および「)」——削除。
- 10) 「あるいは」→「また」
- 11) [手稿異文]「現金売買〔Cashkäufen〕」←「現金支払〔Cashpaym[ents]〕」
- 12) 「より大量の支払」——grössere Masse Zahlungen → größere Massenzahlungen
- 13) MEGA では、Kauf のあとにあるべき「-」が落ちている。
- 14) 「の機能において」——削除。
- 15) 「の機能において」——削除。
- 16) [手稿異文]「より多くの異なった諸資本の〔von mehr verschieden Capitalien〕」←「異なった諸資本の〔verschiedner Capitalien〕」
- 17) 「より多くの異なった諸資本の還流〔returns〕が、同じ貨幣額によって媒介される」→「同じ貨幣額が、より多数の個別資本の還流を媒介する」

全体として、このような時期には通貨〔currency〕¹⁾は「潤沢に」²⁾現われる。といっても、第2の部分³⁾は⁴⁾収縮し、他方、第1の部分⁵⁾は⁶⁾膨張するのであるが。

- 1) 「通貨〔currency〕」→「貨幣流通〔Geldumlauf〕」
- 2) 「「潤沢に」〔“full”〕」→「潤沢に〔vollgefüllt〕(fullに)」
- 3) 挿入——「(資本移転)」
- 4) 挿入——「少なくとも相対的には」
- 5) 挿入——「(収入支出)」
- 6) 挿入——「絶対的に」

{¹⁾ 還流〔returns〕が商品資本の貨幣への再転化、 $G-W-G'$ を表現しているということは、^①すでに流通過程²⁾を³⁾考察したときに見たとおりである。信用は⁴⁾還流〔returns〕を、生産的資本家⁵⁾にとってであろうと商人にとってであろうと、現実の還流〔returns〕⁶⁾にはかかわりのないものにする。彼は⁷⁾信用で売る。だから、彼の商品は、それが彼にとって貨幣に再転化するまえに、つまり⁸⁾彼自身のもとに貨幣形態で還流してくる〔retourniren〕まえに譲渡されているのである。他方では彼は信用で買う。したがって彼の商品の価値は、⁹⁾この価値が現実に貨幣に転化されるまえに、¹⁰⁾生産資本なり商品資本なりに再転化しているのである。しかし繁栄期には、手形が満期になり支払期限がくれば、還流〔returns〕が現に行なわれる¹¹⁾。[510]小売商人〔Epicier〕は卸売商人に、卸売商人は生産者に、生産者は¹²⁾¹³⁾輸入業者に、等々というようにそれぞれ確実に¹⁴⁾還流させる¹⁵⁾。急速で確実な還流〔returns〕という外観は、¹⁶⁾いつでも、その現実性が過ぎ去ってからもかなり長いあいだ¹⁷⁾、ひとたび動きだした信用によって維持される。というのも、信用還流〔Credit-returns〕が現実の還流の代わりをするからである。銀行は、それらの¹⁸⁾顧客が貨幣よりも手形を還流させる〔retourniren〕¹⁹⁾ほうが多くなると、危険を感じはじめる。^{②20)}リヴァプールの銀行理事の証言を見よ。²¹⁾

① [注解] カール・マルクス『資本論』〈経済学草稿，1863–1865年〉。第2部〈第1草稿〉。所収：MEGA, II/4.1, S.140–161 [『資本の流通過程——『資本論』第2部第1稿——』，中峯・大谷他訳，大月書店，1982年，9–35ページ]。

②〔注解〕〔MEGA, II/4.2,〕617ページ14行-618ページ10行を見よ。この原典からの諸抜萃をマルクスが仕上げたのは、彼がここでのテキストの箇所を書くのよりも前であった(923ページ〔MEGA 付属資料「成立と来歴」〕を見よ)。「この注で指示されている箇所での証言は、現行版では第25章の末尾近くに収められている(MEW, Bd.25, S.427-428)。」

- 1) 「{ } および 「 」」——削除。
- 2) 「流通過程」→「再生産過程」
- 3) 挿入——「第2部第1篇で」
- 4) 挿入——「貨幣形態での」
- 5) 「生産的資本家」→「産業資本家」
- 6) 挿入——「の時点」
- 7) 「彼は」→「彼らのどちらもが」
- 8) 〔手稿異文〕ここに、「現実に〔real〕」と書いたのち、消している。
- 9) 挿入——「彼にとっては、」
- 10) 挿入——「商品価格が満期になって支払われるまえに、すでに」
- 11) 「しかし繁栄期には、手形が満期になり支払期限がくれば、還流〔returns〕が現に行なわれる〔vorhanden〕」→「繁栄期には、そのような還流は容易に順調に行なわれる」
- 12) 「生産者に、生産者は」→「製造業者に、製造業者は」
- 13) 挿入——「原料の」
- 14) 〔手稿異文〕「確実に」←「急速に」
- 15) 「還流させる〔retourniren〕」→「支払う」
- 16) 〔手稿異文〕ここに、「……できる」と書いたのち、消している。
- 17) 〔手稿異文〕はじめ、「その現実性が過ぎ去ってからもかなり長いあいだ維持される。」として、この文を終えたが、最後のピリオドを抹消して、以下の部分、すなわち「ひとたび動きだした信用によって」および「というのも、信用還流〔Creditreturns〕が現実の還流の代わりにするからである。」という部分を付け加えた。
- 18) 〔手稿異文〕「それらの」——dieをihreに変更した。
- 19) 「還流させる〔retourniren〕」→「払い込む〔einzahlen〕」
- 20) 挿入——「前に398ページに引用した」なお、この「398」というページ番号は、1994年版についてのものであって、現行版(MEW版)では、このページ番号を挙げたうえで、それへの脚注で、この版の該当ページ(427-428ページ)を指示している。インスティテュート版では、本文そのもののなかでこの版の該当ページを挙げている。

21) 「 } 」——削除。

¹⁾ 反転期²⁾ には事態は反対になる。第 1 の Circulation は収縮する(³⁾ 物価は下がり、労賃〔も下がり〕、^{4) 5)} 取引の総量は減少する、等々)⁶⁾。これに反して、⁷⁾ 信用の減退につれて、貨幣融通〔monetary accommodation〕にたいする要求が増大するのであるが、この件⁸⁾ については、すぐあとでもっと詳しく述べるであろう⁹⁾。

- 1) エンゲルス版では、以下の 2 つのパラグラフが逆に置かれている。
- 2) 「反転〔Adversity〕期」→「恐慌期」
- 3) 「する()」→「し、」
- 4) 「手稿異文」「その結果 Circulation は滞って」——削除。
- 5) 挿入——「就業労働者の数は制限され、」
- 6) 「、等々)」——削除。
- 7) 挿入——「第 2 の Circulation では、」
- 8) 「件〔Geschichte〕」→「点」
- 9) 「であろう」——削除。

そのまえに、ここにもう一つ、私が前に述べたことを書いておかなければならない¹⁾。——^①「信用が優勢な時期には、貨幣流通〔Geldumlauf〕の速度は商品の価格よりも急速に増大するのに、信用の減退にともなつて、商品の価格は Circulation の速度よりも緩慢に下落する。」a) /

① 〔注解〕カール・マルクス『経済学批判。第 1 分冊』、ベルリン、1859 年、83 ページページ (MEGA, II/2, S.172)。

1) 「そのまえに……書いておかなければならない〔vorher zu schicken〕」→「書き込んでおかなければならない〔einzuschalten〕」

【原注】 1330 下 | a) 『経済学批判』、83, 84 ページ。¹⁾【原注終り】 /

1) エンゲルス版では、この出典は、パーレンをつけて引用の末尾に置かれている。

/330 上/ 信用が減退するとともに——信用の減退そのものは再生産過程の停滞と結びついている——¹⁾、第1のもの²⁾に必要な Circulation 総量 は³⁾ 減少するが、他方、第2のもの⁴⁾に必要なそれは増加する、ということにはまったく疑う余地がない。しかし、この命題が、フラートン等々⁵⁾が立てている次の命題とどこまで一致するのかということ、いま詳しく⁶⁾ 研究しなければならない。——

- 1) 「信用が減退するとともに——信用の減退そのものは再生産過程の停滞と結びついている——」→「再生産過程の停滞と同時に現われる信用の減退にさいしては」
- 2) 挿入——「つまり収入支出」
- 3) [手稿異文] ここに、「だから減少する、つまり〔……の〕量」と書いたのち、抹消している。なお、このなかの「量」は、まず「需要」と書き、それを「貨幣 [G[eld]]」と変え、それをさらにこのように変更したものである。
- 4) 挿入——「つまり資本移転」
- 5) 「等々 [etc.]」→「やその他の人々 [und andre]」
- 6) 「いま詳しく [nun näher]」——削除。

①) 「貸付資本にたいする需要と追加の Circulation²⁾ にたいする需要とはまったく別のものであって、両方がいっしょに現われることはあまりない。」(b) /

- ① [注解] ジョン・フラートン『通貨調節論……』、ロンドン、1845年。この引用は、第5章の表題から取られたものである。強調はマルクスによるもの。
- 1) エンゲルス版では、ここで改行されていない。
- 2) 「Circulation」→「流通手段」

【原注】 /330 下/b) ^{1) 2)} フラートン、同前、82ページ³⁾。①「貨幣融通 [pecuniary accommodation] にたいする (すなわち資本の貸付にたいする) 需要は追加流通手段にたいする需要と同じだ、と考えること、あるいは両者はしばしば結びついていると考えることさえも、じっさい大きな

まちがいである。」⁴⁾(同前, 97 ページ。⁵⁾)

①〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。

- 1) エンゲルス版でも、この原注の内容を利用して、同じ箇所⁴⁾に脚注がつけられている。
- 2) エンゲルス版では、本文でのフラートンからの引用をドイツ語で掲げ⁵⁾たうえで、ここに、その英語原文を置いている。
- 3) 挿入——「第5章への表題。」
- 4) エンゲルス版では、フラートンからのこの引用は、このあとさらに、同書の98ページまで続けられている。その終りの部分は、後出のように、草稿の次ページ(すなわち331ページ)の下半の最後のところに引用されている。したがって、エンゲルスが補ったのは、その中間にあたる次の叙述である。——「どの需要も、とくにそれに影響を及ぼす事情のもとで生じるのであって、それらの事情はそれぞれ非常に違っている。すべてが活況を呈し、賃銀は高く、物価は上がり、工場は忙しいとき、このようなときには、より大きな、より頻繁な支払をする必要と結びついた追加機能を果たすために、流通手段の追加供給が必要になるのが常である。ところが、利子が上がり、資本の前貸を求める圧迫がイングランド銀行に加わるのは、おもに、商業循環上のいっそう進んだ段階でのことであり、困難が現われはじめるとき、市場が供給過剰で還流が遅れるときのことである。イングランド銀行は通例その銀行券以外の手段では資本を前貸しないということ、したがって銀行券の発行を拒絶することは融資を拒絶することを意味するということは、ほんとうである。しかし、ひとたび融資が与えられるならば、万事は市場の必要に適合するように行なわれる。貸付はそのまま残り、流通手段は、もし使われなければ、発行者の手に帰って行く。したがって、議会報告書のほんのうわつらを検討しただけでも納得できるように、イングランド銀行の手にある有価証券の量は、その銀行券の circulation と同じ方向に動くよりも反対の方向に動くことのほうが多いのであり、したがって、この大銀行の実例は、けっして地方銀行家たちがあのように強調している学説の例外ではないのである。その学説によれば、どの銀行もその circulation がすでに銀行券流通〔a bank-note currency〕の普通の目的に適合している場合には、その circulation を増加させることはできないのであって、この限界を超えてからはその前貸の追加はすべてその銀行の資本からなされなければならない、その保有する有価証券の一部分を売却するか、またはこのような有価証券へのそれ以上の投資をやめるかすることによって、供給されなければならないというのである。私が前のあるページで引用しておいた

1833年から1840年までの期間の議会報告書から作成した表は、この真理について連続的に例証を与えているが、そのうちの二つだけをとってみても非常に特徴的なものであって、私がそれ以上になにかをつけ加えることはまったく不要なほどである。」このあとに、後出の草稿 331 ページの下半にあるフラートンからの引用が続いている。

- 5) エンゲルス版では、引用部分の拡大に合わせて、この出典も、「フラートン、同前、97、98 ページ」に変更されている。

しかし、このことから「²⁾貨幣融通にたいする需要」が金（ウィルソン、トゥックとその仲間たち³⁾が資本と呼んでいるもの〔 〕にたいする需要と一致する必要があることになるわけではまったくない、ということは、次のところ⁴⁾からもわかる。――

- 1) エンゲルス版では、ここで改行されず、「――」が挿入されている。
- 2) 「〔 〕」および「 』」――削除。
- 3) 「とその仲間たち [et Cons.]」→「とその他の人々 [u. a.]」
- 4) 「次のところ」→「イングランド銀行総裁ウェゲリン氏の次の証言」

¹⁾ 第 241 号²⁾。(ウェゲリン《イングランド銀行総裁》が質される。)
①「この金額〔 〕」(すなわち³⁾ 3日続けて毎日 100 万ずつ)〔 〕までの手形の割引は、公衆がそれ以上の額の現 Circulation を求めないかぎり⁴⁾ 準備を減少させないでしょう。手形割引のさいに発行された銀行券は、銀行業者⁵⁾の媒介によって、また預金によって還流するでしょう。それらの取引が地金の輸出⁶⁾を目的としたものでないかぎり、または、国内にかなりのパニックが起こっていて、そのために公衆が銀行券をしまい込み、銀行業者⁷⁾に払い込もうとしないようなことがないかぎり、準備はそのような巨額な取引によっても影響されないでしょう。」(債務の形態のたんなる変化、云々。)⁸⁾ (銀行法。報告。1857 年。)⁹⁾

①〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。

- 1) エンゲルス版では、ここで改行されていない。
- 2) 「第 241 号」——エンゲルス版では、この証言番号は、次の 2 つの引用の後に挙げられている。
- 3) 「すなわち [nämlich]」——削除。手稿では nämlich と誤記されている。
- 4) 挿入——「」（銀行券の）「」
- 5) 「銀行業者」→「銀行」
- 6) 「地金の輸出」→「金輸出」
- 7) 「銀行業者」→「銀行」
- 8) 「(債務の形態のたんなる変化, 云々。)」——削除。
- 9) エンゲルス版では、この出典は、次の引用の末尾に回されている。

1) 第 500 号。²⁾ ①「イングランド銀行は毎日 150 万の割引をすることができます。そしてそれは、同行の準備にほんの僅かの程度でも影響することなしに、引き続き行なわれます。銀行券は預金として帰ってきます。そして、1 つの勘定から別の勘定へのたんなる移転以外のどんな変化も起こりません。」^{3) 4)} 銀行券は、この場合にはただ、信用の移転⁵⁾ の手段として役立つだけなのである。【原注終り】！

①〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。

- 1) エンゲルス版では、ここで改行されず、「——」が挿入されている。
- 2) 「第 500 号」——エンゲルス版では、この証言番号は、引用の後に挙げられている。
- 3) 挿入——「(『銀行法に関する報告書。1857 年』, 証言第 241 号, 第 500 号。)」
- 4) 挿入——「つまり [also]」
- 5) 「信用の移転 [transfer of credit]」→「諸信用の移転 (Übertragung von Krediten)」

/330 上/ まずもって明らかなのは、流通媒 511 介物の総量が増大せざるをえない第 1 の場合には¹⁾、この媒介物にたいする需要が増大することである。しかしまた同様に明らかなのは、たとえば²⁾ ある製造業者が、より多くの資本を貨幣形態で支出しなければならないので、ある銀行業者³⁾ のもとでの自分の預金残高からソヴリン貨⁴⁾ または銀行券でより

多くを引き出す⁵⁾としても、だからといって資本にたいする彼の需要が増大するわけではなく、ただ、彼が自分の資本を支出するさいの⁶⁾この特殊の形態にたいする彼の需要が増大するだけだということである。ことはただ、彼が自分の資本を Circulation に投じるさいの技術的な形態にかかわるだけである。たとえば、信用制度の発展度が違えば、同量の可変資本、同額⁷⁾の労賃でも、⁸⁾他の国でよりも 1331 上| より多量の通貨 [currency]⁹⁾を必要とするというようなものである。たとえば、イングランドではスコットランドでよりも、ドイツではイングランドでよりも、というように。農業者の¹⁰⁾ (¹¹⁾再生産過程で働いている)¹¹⁾ 同量の資本が、季節が違えば a)、その諸機能¹²⁾を果たすのに違った量の貨幣を必要とする。/

- 1) 「流通媒介物の総量が増大せざるをえない第1の場合には」→「ここに挙げた2つの場合のうち第1の場合、つまり流通媒介物の総量が増大せざるをえない繁栄期には」
- 2) 「たとえば」——削除。
- 3) 「銀行業者」→「銀行」
- 4) 「ソヴリン貨」→「金」
- 5) 「引き出す」——ausziehen → herausziehen
- 6) [手稿異文]「彼が自分の資本を支出するさいの」←「彼の資本の」
- 7) 「額 [Masse]」→「量 [Menge]」
- 8) 挿入——「ある国では」
- 9) 「通貨 [currency]」→「流通手段 [Umlaufsmittel]」
- 10) 「農業者の」→「同様に農業でも、」
- 11) 「(」および「)」——削除。
- 12) 「諸機能」→「機能」

【原注】 1331 下| a)¹⁾【原注終り】/

- 1) 注番号だけが書かれている。エンゲルス版では、当然に、この注はつけられていない。

/331 上/ しかし、フラートンの¹⁾ 対置は正しくない。

- 1) 「フラートンの [v. Fullarton]」→「フラートンがやっているような [wie Fullarton ihn stellt,]」

1) 貸付にたいする需要——貸付にたいする需要の量——が、繁栄期を反転期 [period of adversity] から区別するのではなく、貸付にたいするこの需要の充足が容易だということである。²⁾ それどころか、繁栄期のあいだの信用制度 [Creditsystem] の、だからまた貸付の需要供給のすさまじい発展³⁾、⁴⁾ これこそが反転期⁵⁾ のあいだの逼迫⁶⁾ を招くものなのである。だから、この2つの時期を特徴づけるものは、貸付にたいする需要の量的な規模⁷⁾ の相違ではないのである!⁸⁾

- 1) エンゲルス版では、ここで改行されていない。
- 2) 「貸付にたいする需要——貸付にたいする需要の量——が、繁栄期を反転期 [period of adversity] から区別するのではなく、貸付にたいするこの需要の充足が容易だということである。」→「不況期 [Periode der Stockung] を繁栄期から区別するものは、けっして彼の言うように貸付にたいする強い需要ではなく、この需要の充足が繁栄期には容易で不況期にはいつてからは困難だということである。」
- 3) 「繁栄期のあいだの信用制度 [Creditsystem] の、だからまた貸付の需要供給 [d. demand u. supply of loan] のすさまじい発展」→「繁栄期のあいだの信用制度 [Creditsystem] のすさまじい発展、だからまた貸付資本への需要の激増」
- 4) 挿入——「そしてまたこのような時期にはこの需要に供給が気前よく応じるとのこと、」
- 5) 「反転期 [period of adversity]」→「不況期 [Zeit der Stockung]」
- 6) 「逼迫 [Pressure]」→「信用逼迫 [Kreditklemme]」
- 7) 「量的な規模 [quantitativer Umfang]」→「量 [Größe]」
- 8) 「!」——削除。

すでに前にも述べたように、この2つの時期を区別するものは、《まず第1に、》一方の時期¹⁾ には商人と消費者との²⁾ あいだの³⁾ Circulation

(通貨〔currency〕)⁴⁾にたいする需要が優勢であり、他方の時期⁵⁾には資本家のあいだの取引のための⁶⁾ Circulation⁷⁾にたいする需要が優勢だということである。反動期〔period of reaction〕^{8) 9)}には前者が減少して後者が増加するのである。

- 1) 「一方の時期」→「繁栄期」
- 2) 「商人と消費者との」→「消費者と商人との」
- 3) [手稿異文]「とのあいだの」←「にとつての」
- 4) 「Circulation (通貨〔currency〕)」→「流通手段〔Umlaufsmittel〕」
- 5) 「他方の時期」→「反転期〔Periode des Rückschlags〕」
- 6) 「取引のための」——削除。
- 7) 「Circulation」→「流通手段〔Umlaufsmittel〕」
- 8) [手稿異文]「反動期〔period of reaction〕」←「反転の時期〔time of adversity〕」
- 9) 「反動期〔period of reaction〕」→「不況期〔Periode der Geschäftsstockung〕」

ところで、このフラートン等々にたいして決定的な役割を果たしている¹⁾のは、イングランド銀行の²⁾ 有価証券³⁾が増加するような時期には同行の銀行券 Circulation〔Notencirculation〕は減少し、反対の時期には反対だという現象である。b) ⁴⁾ 有価証券の数⁵⁾が表現しているのは、貨幣融通〔pecuniary accommodation〕の 512 大きさ、つまり手形の割引⁶⁾〔の大きさ〕である。{⁷⁾ ⁸⁾ および容易に換金できる⁹⁾ 有価証券を担保とする貸付〔の大きさ〕である。()}⁸⁾ ときにはイングランド銀行は、長期手形を担保にして貸付を行う、つまりそれを担保に前貸を行なう。1847年には、東インド貿易関連手形を担保にそうしたのであった。¹⁰⁾ }⁷⁾ /

- 1) 「このフラートン等々にたいして決定的な役割を果たしている〔d. Fullarton etc. bestimmt〕」→「フラートンや他の人々の目に決定的に重要なこととして映る〔Fullarton und andren als entscheidend wichtig auffällt〕」
- 2) 挿入——「手持ちの」
- 3) 挿入——「——貸付担保および手形——」

- 4) 挿入——「しかし」
- 5) 「数 [Anzahl]」→「大きさ [Höhe]」
- 6) 「手形の割引」→「割引かれた手形」
- 7) 「{ } および 「 」」——削除。
- 8) 「() および 「[]」——削除。
- 9) 「容易に換金できる [easily convertible]」→「流通可能な [gangbar]」
- 10) 「ときにはイングランド銀行は、長期手形を担保にして貸付を行う、つまりそれを担保に前貸を行なう。1847年には、東インド貿易関連手形を担保にそうしたのであった。」——削除。

【原注】 /331 下/ b)¹⁾ フラートンのこの個所の全体を抜き出しておくことが重要である。なぜならこのなかには、彼がここで「資本」という言葉でなにを考えているかも示されているからである。²⁾

- 1) 以下の注の内容は、エンゲルス版では、上記のパラグラフの末尾に、改行せずに組込まれている。
- 2) 「フラートンのこの個所の全体を抜き出しておくことが重要である。なぜならこのなかには、彼がここで「資本」という言葉でなにを考えているかも示されているからである。」→「そこで、フラートンは、いま 436 ページの注 90 で引用した箇所ですべてのよう言うのである。」(このなかの「436 ページ」というページ番号は、1994 年版についてのものであり、「注 90」とは、さきに見た、フラートンからの長い引用のある注のことである。)

¹⁾ ①「議会報告書のほんのうわつらを検討しただけでも納得できるように、²⁾ イングランド銀行の保有有価証券は、同行の Circulation と同じ方向に動くよりも反対の方向に動くことのほうが多い³⁾ のであり、したがって、この大銀行の実例はけっして、地方銀行業者たちが強硬に主張している次のような趣旨の説の例外ではないのである⁴⁾。すなわち、どの銀行も、自行の Circulation がすでに、銀行券通貨 [a banknote currency] を用いるさいの普通の目的に適合している場合には、この Circulation を増加させることはできないのであり⁵⁾、この限界が越えられたのちに行なわれるその前貸の追加は、すべて自行の資本からなされなければならない

いのであって、その保有する有価証券の一部分を売却するか、またはこのような有価証券へのそれ以上の投資をやめるかすることによって、供給されなければならない⁶⁾、ということである。』⁷⁾ (8)⁹⁾では、¹⁰⁾ ここではなにを資本と言っているのか？ 銀行はもはや、¹¹⁾ 自行にはもちろん少しも費用のかからない支払約束〔promiss to pay〕のかたちでは¹²⁾、前貸をすることができないということである。だが、銀行はいったい¹³⁾ どのようにして¹⁴⁾ 前貸をするのか？ 1)¹⁵⁾ 準備有価証券の売却 (この準備有価証券というのは、国債、株券およびその他の利子付証券のことである〔 〕)¹⁶⁾ によって¹⁷⁾。だが、なにと引き換えに銀行はこれらの証券を売めるのか？ 貨幣、すなわち金または銀行券と引き換えにである。(18) この銀行券は、イングランド銀行の場合¹⁹⁾ のように法貨²⁰⁾ であるかぎりでのものである〔 〕¹⁸⁾。つまり銀行が前貸しするものはどんな事情のもとでも貨幣である。ところがこの貨幣が、いまは銀行の資本の一部分を構成しているのである。銀行が金を前貸しする場合には、このことは自明²¹⁾ である。銀行券の場合にも、今ではこの銀行券は資本を表わしている。なぜならば、銀行はこれと引き換えに現実の価値、利子付証券を譲渡したのだからである。私営銀行業者²²⁾ の場合には、²³⁾ 有価証券の売却によって彼らのもとに流れ込む銀行券は、イングランド銀行券²⁴⁾ でしかありえない。というのは、それ以外の銀行券は有価証券代金の支払では²⁵⁾ 受け取られないからである。だが、それがイングランド銀行自身である場合には、同行は、自分自身の銀行券を回収するために、資本、すなわち利子付証券を要するのである。そのうえに、イングランド銀行はそれによって自分自身の銀行券を Circulation から引き上げることになる。(26) 同行がこの同じ銀行券、あるいはそれに代わる銀行券をふたたび発行できるのは、同行の Circulation が最大限に達していない場合だけである。²⁷⁾ しかし²⁸⁾、イングランド銀行が同じ銀行券²⁹⁾ をふたたび発行す³⁰⁾ れば、それは今度は資本を表わすのである。) ²⁶⁾ しかし、同行がその有価証券を売却するにいたるのはどのようにしてか、ということのはちに研究する必要がある。²⁸⁾ 「または

このような有価証券へのそれ以上の投資をやめることによって」という付け加えは、私営銀行業者の場合には、ただ、彼らがいつもならそのような有価証券に投資したであろうイングランド銀行〔券〕または金を、いまは投資できない、ということの意味するだけである。私営銀行業者は、自分自身の銀行券では有価証券を買うことができない。イングランド銀行は、もし金または《自分自身の》銀行券を手に入れるために有価証券を売却する必要がある場合には、もちろん、自行の銀行券で有価証券を買うことができないのである。³¹⁾ ³²⁾ どんな事情のもとでも³³⁾ 資本という言葉は、銀行業者は自分の信用を貸す〔verpumpen〕だけではなくて、云々という³⁴⁾ 銀行業者的な意味〔Banquirsinn〕で用いられているだけなのである。³⁵⁾ ⑧「1837年1月3日、信用を維持し貨幣市場の困難に対処するためにイングランド銀行の資力が極度まで利用しつくされたとき、同行の貸付および割引への前貸が17,022,000ポンド・スターリングという巨額に達したのをわれわれは見いだすのであるが、この金額はあの戦争〔ナポレオン戦争〕以来ほとんど聞いたことのないもので、それは、この期間中17,076,000ポンド・スターリングという低い水準にそのままとどまっていた総発券高にほぼ等しかったのである！³⁶⁾ 他方、1833年6月4日には、18,892,000ポンド・スターリングというCirculationが、972,000ポンド・スターリングを超えないイングランド銀行の私的有価証券保有額にかんする銀行報告と結びついているのであって、この後者の額は、過去半世紀間の記録中の最低ではないにしても、ほとんどそれに近いものだったのである。」（フラートン、97、98ページ。）【原注終り】³⁷⁾ /

①〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。

②〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。

③〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。

1) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

2) 「議会報告書のほんのうわつらを検討しただけでも納得できるように、」
——削除。

3) 「同じ方向に動くよりも反対の方向に動くことのほうが多い」→「たいてい

は反対の方向に動く」

- 4) 「したがって、この大銀行の実例はけっして、地方銀行業者たちが強硬に主張している次のような趣旨の説の例外ではないのである」→「このことは、私営銀行のあいだでは古くから認められている次のような命題を確証するのである」
- 5) 「自行の Circulation がすでに、銀行券通貨 [a banknote currency] を用いるさいの普通の目的に適合している場合には、この Circulation を増加させることはできないのであり」→「その取引客の需要によって規定されるある金額を超えてその銀行券発行高を増加させることはできないのであるが」
- 6) 「この限界が越えられたのちに行なわれるその前貸の追加は、すべて自行の資本からなされなければならないのであって、その保有する有価証券の一部分を売却するか、またはこのような有価証券へのそれ以上の投資をやめるかすることによって、供給されなければならない」→「もし銀行がこの金額を超えて前貸をしようとするならば、銀行は自行の資本からそれをしなければならないのであって、つまり有価証券を現金化するか、または平素は銀行が有価証券に投じるであろうはずの入金を前貸にまわすかしなければならない」
- 7) エンゲルス版では、ここで改行されている。
- 8) 「() ——削除。なお、手稿には、これに対応する「)」が欠落している。
- 9) 挿入——「だが、ここでもまた、フラートンがなにを資本と考えているかが現われている。」
- 10) 「では [also],」 ——削除。
- 11) 挿入——「自分自身の銀行券,」
- 12) 「のかたちでは [in]」→「をもっては [mit]」
- 13) 「いったい [denn]」→「その場合 [dann]」
- 14) 「どのようにして [wie]」→「なにで [womit]」
- 15) 「1)」 ——削除。なお、手稿でも、この「1)」に対応する「2)」以下は見当たらない。
- 16) 「(この準備有価証券というのは、国債、株券 [Aktienpapiere] およびその他の利子付証券 [Papiere] のことである ())」→「すなわち国債、株式 [Aktien] およびその他の利子付有価証券 [Wertpapiere]」
- 17) 「によって」→「の売却代金ををもって」
- 18) 「() および「()」 ——削除。
- 19) 「イングランド銀行の場合」→「イングランド銀行のそれ」
- 20) 「法貨 [legal tender]」→「法定支払手段」

- 21) 「自明 [self evident]」→「まったく明らか [handgreiflich]」
- 22) 「私営銀行業者 [private bankers]」→「私営銀行 [Privatbanken]」
- 23) 挿入に——「量から見て [der Masse nach]」
- 24) 挿入——「またはその銀行自身の銀行券」
- 25) 挿入——「ほとんど [schwerlich]」
- 26) 「(「)および(「)」)——削除。
- 27) 「同行がこの同じ銀行券,あるいはそれに代わる銀行券をふたたび発行できるのは,同行の Circulation が最大限に達していない場合だけである。」
——削除。
- 28) 「しかし」→「だから」
- 29) 「同じ銀行券 [dieselben]」→「この銀行券」
- 30) 挿入——「るか,またはそのかわりに同額の新たな銀行券を発行するとす」
- 31) [手稿異文]ここに,「イングランド銀行がたんに〔……〕余儀なくされているのなら」と書いたのち,抹消している。
- 32) 「しかし,同行がその有価証券を売却するにいたるのはどのようにしてか,ということはのちに研究する必要がある。「またはこのような有価証券へのそれ以上の投資をやめることによって」という付け加えは,私営銀行業者の場合には,ただ,彼らがいづもならそのような有価証券に投資したであろうイングランド銀行〔券〕または金を,いまは投資できない,ということの意味するだけである。私営銀行業者は,自分自身の銀行券では有価証券を買うことができない。イングランド銀行は,もし金または《自分自身の》銀行券を手に入れるために有価証券を売却する必要がある場合には,もちろん,自行の銀行券で有価証券を買うことができないのである。」→「しかも,それが資本を表わしているということは,それが資本家への前貸にあてられる場合でも,後にこのような貨幣融通にたいする需要が減退してそれが有価証券への新投資に向けられる場合でも,同じことである。」
- 33) 「どんな事情のもとでも [unter allen Umständen]」→「すべてこれらの事情のもとでは [unter allen diesen Umständen],ここでは」
- 34) 「銀行業者は自分の信用を貸す [verpumpen]だけではなくて,云々〔^(a)...〕という」(〔^(a)〕MEGA のテキストではここに奇妙な閉じ角括弧があるが,誤植であろう。)→「銀行業者が自分のたんなる信用よりも多くのものを貸し付けることを余儀なくされている,ということの意味する」
- 35) エンゲルス版では,フラートンからの以下の引用は,フラートンからの長い引用を含む前出の注(90)のなかで,エンゲルスの挿入部分のあとに置かれている。

36) 「!」——削除。

37) エンゲルス版では、このあとに次の本文の部分がが続いている。

/331 上/ 《イングランド》銀行はすべての貸付と割引とを自行の銀行券で行なうので、これらの銀行券がどうなるのか、ということが問題となる。¹⁾ 私営銀行業者の場合には事情が異なる。なぜなら、彼らはそのような場合に、イングランド銀行券²⁾を自分自身の銀行券の代わりとすることができるからである。³⁾

- 1) 「《イングランド》銀行はすべての貸付と割引とを自行の銀行券で行なうので、これらの銀行券がどうなるのか、ということが問題となる。私営銀行業者の場合には事情が異なる。なぜなら、彼らはそのような場合に、イングランド銀行券を自分自身の銀行券の代わりとすることができるからである。」→「周知のように、イングランド銀行はその前貸をすべて自行の銀行券で行なっている。ところで、それにもかかわらず通例この銀行の銀行券流通高〔Notenzirkulation〕は、その手持ちの割引手形や貸付担保の増加、つまりこの銀行が行なう前貸の増加に比例して減少するとすれば、——流通〔Umlauf〕に投じられた銀行券はどうなるのか？ それはどのようにして銀行に還流するのか？」
- 2) 「イングランド銀行券」——手稿では、B. o. N. となっている。Bank of England Notes の略であろう。
- 3) 「私営銀行業者の場合には事情が異なる。なぜなら、彼らはそのような場合に、イングランド銀行券を自分自身の銀行券の代わりとすることができるからである。」——削除。

まず第1に、「貨幣融通にたいする需要」が国際収支¹⁾の逆調から²⁾、したがってまた地金の流出から生じた³⁾ものである場合には、事柄は非常に簡単である。手形が銀行券で割引される。この銀行券が地金と交換され⁴⁾、その地金⁵⁾が輸出される。それはちょうど、同行が手形割引で⁶⁾直接に、銀行券の媒介なしに、地金⁷⁾を支払ったのと同じことである。このような増大する需要——場合によっては700万ポンド・スターリングから1000

万ポンド・スターリングにも達する——は、もちろん、⁸⁾ 国内 Circulation には1枚の5ポンド券をも追加しない。イングランド銀行はこの場合には資本を前貸しするのであって流通手段〔means of circulation〕を前貸しするのではない、ということには⁹⁾、二重の意味がある。第1には、同行は、信用ではなく現実の価値を、自分自身の、または自分に預金された資本の一部を前貸しするのだ、ということである。他方では¹⁰⁾、同行は、国内 circulation のための貨幣¹¹⁾ではなく国際 Circulation のための貨幣を、世界貨幣を、前貸しするのだ、ということである。そしてこの形態では¹²⁾、貨幣はいつでも蓄蔵貨幣としての形態で、その金属製の肉体で存在しなければならない。この形態では貨幣は、ただ価値の〔513〕形態であるだけではなく、この貨幣を自分の貨幣形態とする価値に¹³⁾等しい¹⁴⁾のである。ところで、この金は、銀行にとってであろうと輸出商人または地金取扱業者¹⁵⁾にとってであろうと¹⁶⁾ 資本、すなわち銀行業者資本または商人資本を表わしているとはいえ、需要は資本としての金にたいしてではなく貨幣資本の絶対的形態としての金にたいして生じる。この需要は、まさに、外国市場がイギリスの実現不可能な商品資本で行き詰まっている¹⁷⁾ような瞬間¹⁸⁾にこそ、生じるのである。だから、求められるものは、資本¹⁹⁾としての資本ではなく、貨幣²⁰⁾としての資本である。すなわち、貨幣が一般的な世界市場商品として取る形態にある資本である。そしてこれは、貴金属という、貨幣の本源的な形態である。だから、流出²¹⁾は、①フラートン、トゥック等々が言うのとは違って、「²²⁾ たんなる資本問題」²²⁾ではない。そうではなくて、それは貨幣の問題である。1つの独自の機能における貨幣の問題だとはいえ、とにかく貨幣の問題である。通貨説の奴ら〔d. currency Kerls〕が考えている²³⁾ようにそれが「国内²⁴⁾ circulation」の問題ではないということは、けっして、フラートン等々²⁵⁾が考えるようにそれがたんなる「²⁶⁾ 資本の問題」²⁶⁾だということを証明するものではない。それは、貨幣²⁷⁾が国際的支払手段として取る形態における貨幣の問題である。²⁸⁾「²⁸⁾ 資本が²⁹⁾ 商品で移転されるか正

貨で移転されるかということ、取引の本性には少しも触れない点である」c) ³⁰⁾ が、³¹⁾ しかしそれは、流出が生じるか生じないかという事情³²⁾ には非常に大きく影響する。資本が「正金の形態で移転される」³³⁾ のは、「商品の形態で移転される」³⁴⁾ ことがまったくできないか、またはきわめて大きな損失なしにはできないからである。現代の銀行制度³⁵⁾ が「地金の流出」³⁶⁾ にたいして感じる不安は、かつて³⁾ 重金主義が、唯一の真の富《としての》地金について夢想していたいっさいのこと³⁷⁾ をはるかに凌駕する。たとえば、イングランド銀行総裁モリスが次のように質される。³⁸⁾
 ——11332 上| 第 3846 号。³⁹⁾ ④「私は在庫品や固定資本の減価のことを言っているのですが、」この場合、あなたは、あらゆる種類の在庫品や生産物に投下されているすべての資産が同じように減価していたということ、原綿も生糸も原毛も同じような捨て値で大陸に送られたということ、また、砂糖やコーヒーや茶が強制売却のときのように犠牲にされたということをご存じないのですか？ ——食糧の大量輸入の結果として生じた地金の流出⁴⁰⁾ に対処するためにこの国が多額の犠牲⁴¹⁾ を払わなければならなかったのは、避けられないことでした。〔 〕 ⁴²⁾ 第 3848 号。「あなたは、このような犠牲を払って金を回収しようとするよりも、イングランド銀行の金庫にあった 800 万ポンド・スターリングに手をつけるほうがましだった、とはお考えになりませんか？ ——いいえ、私はそうは考えません⁴³⁾。〔 〕 (a) ⁴⁴⁾ 金こそは、ここで唯一の本質的な富とみなされているものである。 /

① 〔注解〕 ジョン・フラートン『通貨調節論……』、ロンドン、1845 年。130 ページには次のように書かれている。——「実際、これは通貨の問題ではなくて、資本の問題である。」

② 〔注解〕 この引用での強調はマルクスによるもの。

③ 〔注解〕 重金主義者たちは、封建的な現物原理と小商品生産者の消費志向に対立して、金銀——すなわち貨幣——を、富の唯一の形態だと、だからまた、あらゆる経済的活動とあらゆる社会的努力の最も重要な目標でもあるのだと、判定した。売るために生産することが、貨幣を流通から引き揚げるために売

ることが、重金主義の基本志向であった。だから重金主義者は外国への金流出にも反対した。彼らによって基礎づけられた経済政策的諸活動の一つは金銀輸出の厳格な禁止だったのである。——カール・マルクス『経済学批判』〈1861-1863年草稿〉を見よ (MEGA, II/3.2, S.619-620)。

④〔注解〕「ロンドン・ノート, 1850-1853年」, 第7冊 (MEGA, IV/8, S.263, Z.23-33), から取られている。——〔MEGA, II/4.2,〕481ページ23-32行を見よ。『商業的窮境……にかんする秘密委員会第1次報告書』, 1848年6月8日。〔ここで指示されている箇所は、現行版では、第26章のはじめのほうに収められている (MEW, Bd.25, S.431)。 (拙稿「信用と架空資本」 (『資本論』第3部第25章) の草稿について (下)), 『経済志林』, 第51巻第4号, 1984年, 45ページ, 所収。)〕

- 1) 「国際収支」——balance of payments → nationale Zahlungsbilanz
- 2) 挿入——「生じたものであり」
- 3) 「地金の流出から生じた」→「金流出を媒介する」
- 4) 「地金と交換され」→「イングランド銀行自身の発券部で金と交換され」
- 5) 「地金」→「金」
- 6) 「手形割引で」→「手形割引のさいにただちに」
- 7) 「地金」→「金」
- 8) 挿入——「この国の」
- 9) 「ということには」→「と言うとすれば、それには」
- 10) 「他方では」→「第2には」
- 11)〔手稿異文〕「貨幣」←「銀行券」
- 12) 「この形態では」→「この目的のためには」
- 13) 挿入——「それ自身」
- 14) 「等しい」—— = → gleich
- 15) 「輸出商人または地金取扱業者」→「輸出金取扱業者」
- 16) 「……とってであろうと……とってであろうと」→「……とってでも……とってでも」
- 17) 「行き詰まっている〔stocken〕」→「充滿している〔vollgepfropft sein〕」
- 18) 「ような瞬間〔ein Augenblick, wo〕」→「その瞬間〔der Augenblick, wo〕」
- 19) 「資本」——エンゲルス版では強調されている。
- 20) 「貨幣」——エンゲルス版でも強調されている。
- 21) 「流出」→「金流出」
- 22) 「」「および」「」——削除。ただし、エンゲルス版でも、「たんなる資本

- 問題」は英語で書かれている。
- 23) 「通貨説の奴らが考えている [d. currency Kerls meinen]」→「通貨説の人々 [die Leute von der Currency-Theorie] が主張している」
 - 24) 「国内」——エンゲルス版では強調されている。
 - 25) 「等々 [etc.]」→「やその他の人々」
 - 26) 「「」および「」」——削除。ただし、エンゲルス版でも、「資本の問題」は英語で書かれている。
 - 27) 「貨幣」——money → Geld
 - 28) 挿入——「この」
 - 29) 挿入——「」(国内の凶作のあとでの数百万クォーターの外国産小麦の購入価格)「」
 - 30) (手稿異文) ここに、「。ついでに次のことを——」と書いたのち、消している。
 - 31) 「が,」→「。」
 - 32) 「事情 [circumstances]」→「問題」
 - 33) 「「正金の形態で移転される」[„transmitted in specie“]」→「貴金属の形態で移転される」
 - 34) 「「商品の形態で移転される」[„transmitted in maerchandise“]」→「商品の形態で移転される」
 - 35) 「銀行制度」——Banquiersystem → Banksystem
 - 36) 「「地金の流出」[„drain of bullion“]」→「金流出」
 - 37) 「かつて重金主義が、唯一の真の富《としての》地金について夢想していた [träumen] ippさいのこと」→「かつて、貴金属を唯一の富と考える重金主義が手に入れたいと夢想していた [erträumen] ippさいのこと」(手稿原文では, alles was d. Monetarsystem je geträumt hat v. bullion als d. einzig wahren Reichthum ist となっている。このなかの als は後から書き加えられている。この als を生かして読むなら、最後の ist は消し忘れられたものと考えべきであろう。なお、MEGA の異文注には、この「としての」があとから書き加えられたものであることは記載されていない。
 - 38) 「たとえば、イングランド銀行総裁モリスが次のように質される。」→「たとえば、1847-48年の恐慌について議会の委員会でイングランド銀行総裁モリスにたいして行なわれた次の尋問をとってみよう。」
 - 39) 挿入——「(問い——)」
 - 40) 「地金の流出」→「金流出」(エンゲルス版では強調されている。)
 - 41) 「多大の犠牲」——エンゲルス版では、強調されている。

42) 挿入——「——」

43) 「私はそうは考えません」——エンゲルス版では強調されている。

44) 挿入——「——」

【原注】 /331 下/c) ¹⁾ ①フラートン。〔() 131²⁾ページ。】【原注終り】 |

① 【注解】 ジョン・フラートン『通貨調節論……』, ロンドン, 1845年。

1) エンゲルス版では, 引用のあとに括弧書きされている。

2) 「131」——手稿では, 「121」となっている。

【原注】 1332 下|a) ¹⁾ 商業的窮境。1847–48年。もっともこの場合, イングランド銀行の糞ひり主義²⁾は, 同行が1847年にも1857年にも恐慌の結果すばらしい商売をして, その配当が1848年には9%以上, 1858年には11%以上に増大した, ということによって, いささか和らげられたのである。【原注終り】 |

1) この注はエンゲルス版では削除されている。

2) 「糞ひり主義」——原語は Stercorismus であるが, これはラテン語の ster-
cus (糞) の属格 stercoris からの造語でもあろうか。あまり品のよくない言葉ではあるが, とりあえずこのような訳語をつけておく。エンゲルスがこの注を省いたのは, まさかこの語がはいていたからではないであろうが, 一般にエンゲルスは, マルクスのこうしたきつい, あるいはえげつない, あるいはあからさまな表現を, しばしば, やわらかい, 品のよい, 控え目な表現に変えている。ちなみに, かつてカウツキー版の『資本論』や『剰余価値学説史』が, モスクワの「マルクスレーニン主義者」から, マルクスの原稿での言葉遣いを「和らげた」と非難されたが, それが非難されるべきことであったとするならば, 『資本論』編集におけるエンゲルスも, 同様の非難を受けなければならぬところであろう。(MEGAではこの語は, テキストの部で "xxxxxxxx", すなわち「解読不能」としたうえで, 異文目録では, 「可能な読み方: sacrifice」としている。しかし, 筆者の模写してきたところによれば, 手稿のこの語を sacrifice と読むことはできそうにない。MEGA 編集者も, この品のよくない語に戸惑ったのであろうか?)

/332 上/ {¹⁾ ²⁾ トゥックの発見, すなわち, ^①「ただ1つか2つの, しかも

十分に説明のできる例外を除けば、過去半[514]世紀間に起こった、金の流出を伴う為替相場の異常な低落は、すべて、いつでも流通媒介物の比較的低い状態といっしょに起こっており、また逆の場合には逆であった」(フラートン, 121 ページ)——ということは、次のことを証明している。すなわち、この流出³⁾が現われるのは、たいていは、⁴⁾「すでに始まっている崩壊の信号」として、^②⁵⁾ 市場の在庫過剰や、われわれの生産物にたいする外国の需要の途絶や、還流の遅れや、またこれらのすべてのことの必然的な結果としての商業上の不信や、工場の閉鎖や、労働者の飢餓や、産業と事業との一般的な停滞やの徴候」(フラートン, 129 ページ)として現われるのだ、ということである。⁶⁾[これは]もちろん同時に、「潤沢な Circulation」⁷⁾は地金を追い出し、低位の Circulation は地金⁸⁾を引き寄せる⁹⁾、という通貨説の奴ら [d. currency Kerls]¹⁰⁾にたいする最良の反駁¹¹⁾[である]。しかし、われわれにとってとくに注目すべきであるのは、地金流入のことを考えるからである。¹²⁾彼らの主張とは反対に、潤沢な地金準備¹³⁾はたいてい繁栄期にじっさいにみられるものだとはいえ、この蓄蔵貨幣はつねに、嵐 [Sturm] のあとにくる沈静停滞期¹⁴⁾に形成されるのである。)}¹¹⁾

① [注解] この引用での強調はマルクスによるもの。

② [注解] この引用での強調はマルクスによるもの。

1) 「{ } および 「 」」——削除。

2) 挿入——「フラートンが引用している」

3) 「流出」→「金流出」

4) 挿入——「興奮と騰貴との時期のあとのことであって、」

5) 「 」として、「 」→「……」

6) 挿入——「これは」

7) 「 」——削除。

8) 「地金」——手稿では it とあるべきところが its となっている。

9) 挿入——「 」

10) 「通貨説の奴ら [d. currency Kerls]」→「通貨説の人々 [Currency-Leute] の主張」

- 11) 挿入——「である」
 12) 「しかし、われわれにとってとくに注目すべきであるのは、地金流入のことを考えるからである。[Aber f. uns besonders zu merken, wegen d. Bullioneinfluss.]」——削除。
 13) 「潤沢な地金準備 [a full Bullion Reserve]」→「イングランド銀行の強大な金準備」
 14) 「沈静停滞期」——d. quiescent u. stagnant Zeit → die lustlosen und stagnierenden Zeit

さて、われわれは地金の流出を度外視しよう。——¹⁾〔{} 地金の流出については²⁾ ippさいの知恵が次のことに帰着する。すなわち、国際的な³⁾ 流通・支払手段にたいする需要は、国内の⁴⁾ 流通・支払手段にたいする需要とは違う、ということであり ⁵⁾それゆえにまた、当然、⁶⁾「流出の存在は必ずしも Circulation にたいする国内需要の減退を意味しない」(フラートン、112 ページ)⁷⁾ ということにもなるのである⁸⁾、また、貴金属の国外輸出 (⁸⁾ 国際 Circulation への貴金属の投入)⁹⁾ は、国内 Circulation への銀行券や鑄貨の投入と同じではない、ということである。¹⁰⁾ なお、¹⁾私はすでに以前に、国際的な支払のための準備金として集中されている蓄蔵貨幣の運動は、それ自体としては、流通手段としての貨幣の運動とは少しも関係がないということ述べておいた。〔{}〕もっとも、次のことによって紛糾の種がはいりこんでくる。すなわち、この準備金が同時に銀行券の兌換性と預金とにたいする保証として役立つということによって、すなわち、¹¹⁾私が貨幣の本性から展開した蓄蔵貨幣のさまざまな機能、つまり支払手段 (国内におけるそれ、満期になった支払)¹²⁾ のための準備金としての、通貨 [currency]¹³⁾ の準備金としての、最後に世界貨幣の準備金としての、蓄蔵貨幣の機能が、ただ1つの準備金に負われる ¹⁴⁾それゆえに¹⁵⁾ また、事情によっては国内への流出¹⁶⁾ が国外への流出と結びつくことがありうるということにもなる¹⁷⁾ ということによってであり、¹⁸⁾ さらにそのうえに、蓄蔵貨幣がこれらの質のどれかにおける準備金として果たさなければならぬ諸機能の本性から¹⁹⁾ はけって

〔出てこない〕機能である、²⁰⁾ 信用制度〔Creditsystem〕や信用貨幣が発達しているところ²¹⁾で²²⁾ 兌換の保証準備として役立つという機能が付け加えられるということ²³⁾によってであり、²⁴⁾そしてこの2つのこととともに²⁵⁾、1) ²⁶⁾ 1つの主要銀行への一国の準備金の集中、2) できるかぎりの最低限度へのこの準備金の縮小〔が生じること〕によってである²⁷⁾。ここから、フラートンの次のような嘆き²⁸⁾も出てくるのである。——「そして、²⁹⁾ イングランドでイングランド銀行の蓄蔵貨幣がまったく 515 枯渇しそうに思われるときにきまって現われる熱病的な不安動揺の状態に比べて、大陸諸国では為替相場の変動がまったく平静にすらすらと経過するのがふつうだということを思えば、この点で金属通貨〔currency〕がもっている大きな長所に思いあたらざるをえないのである。」(同前、142ページ。)³⁰⁾ }³¹⁾ ³²⁾ ——では、³³⁾ 地金の流出³⁴⁾ を度外視すれば、1133上! どうしたら、³⁵⁾ たとえばイングランド銀行は、自行の〔銀行券〕発行額〔の増加〕なしに³⁶⁾、自行の有価証券を(すなわち自行の貨幣融通の額を)³⁷⁾ 増やすことができるのであろうか?

① 〔注解〕カール・マルクス『経済学批判。第1分冊』、ベルリン、1859年、130-132ページ(MEGA, II/2, S.211/212)。

1) 「さて、われわれは地金の流出を度外視しよう。——」——削除。

2) 「地金の流出については〔wo〕」→「金流出については〔mit Bezug auf die Goldabflüsse〕」

3) 「国際的な」——エンゲルス版でも強調されている。

4) 「国内の」——エンゲルス版でも強調されている。

5) 「{ } および 「 」」→「() および 「 」」

6) 挿入——「フラートンが112ページで言っているように、」

7) 「(フラートン、112ページ)」——削除。

8) 「()」→「, 」

9) 「) 」——削除。

10) 「{ }」——削除。

11) 「この準備金が同時に銀行券の兌換性と預金とにたいする保証として役立つということによって、すなわち、」——削除。

- 12) 「支払手段 (国内におけるそれ, 満期になった支払)」→「国内における, 支払手段, 満期になった支払」
- 13) 「通貨 [currency]」→「流通手段 [Umlaufsmittel]」
- 14) 「{」→「,」
- 15) 「それゆえに [wesswegen]」→「ここから [woraus]」
- 16) 「国内への流出 [ein internal drain]」→「イングランド銀行からの国内への金流出」
- 17) 「}」→「,」
- 18) 「であり,」→「である。」
- 19) [手稿異文] ここに, 「付け加えられるのではけっしてない, 金属としての機能である。」と書いたのち, 消している。
- 20) 挿入——「別の紛糾の種が加わってくるのは, この蓄蔵貨幣にまったく恣意的に負わされているもう1つの機能, すなわち」
- 21) 「ところ」→「諸国」
- 22) 挿入——「銀行券の」
- 23) 「——この機能は, 蓄蔵貨幣がこれらの質のどれかにおける準備金として果たさなければならぬ諸機能の本性からはけっして [出てこない] 機能である——が付け加えられるということ」——削除。
- 24) 「であり,」→「である。」
- 25) 「そしてこの2つのこととともに」→「そのうえ, 最後に」
- 26) 挿入——「ただ」
- 27) 「[が生じること] によってである」→「ということが加わる」
- 28) 挿入——「(143 ページ)」
- 29) 「そして,」——削除。
- 30) 「(同前, 142 ページ。)」——削除。
- 31) 「}」——削除。
- 32) エンゲルス版では, ここで改行されている。
- 33) 「——では,」→「さて,」
- 34) 「地金の流出」→「金流出」
- 35) 挿入——「銀行券を発行する銀行,」
- 36) 「自行の〔銀行券〕発行額〔の増加〕なしに」→「自行の銀行券発行額の増加なしに」
- 37) 「自行の有価証券を (すなわち自行の貨幣融通の額を)」→「自行が行なう貨幣融通の額を」

同行の店舗の外にある銀行券は、流通しようとする私人の金庫のなかで眠ってしようとする、同行自身に関していえば、すべて Circulation のなかにある、すなわち同行自身の保有にはない¹⁾。だから、Circulation を増やさないためには、²⁾ 有価証券にたいして発行された銀行券は³⁾ 同行に還流し〔refluiren〕なければならない。⁴⁾ これは⁵⁾ 2つの仕方で起こりうる。

- 1) 「同行自身の保有にはない」→「同行の保有の外にある」
- 2) 「Circulation を増やさないためには、」——削除。
- 3) 「有価証券にたいして発行された銀行券は」→「イングランド銀行が割引や担保貸付、つまり有価証券担保の前貸を拡張すれば、そのために発行される銀行券は」
- 4) 挿入——「というのは、もし還流しなければ Circulation の額を大きくすることになるが、まさにそうであってはならないところなのだからである。」
- 5) 「これは」→「この還流は」

第1に¹⁾、同行は A に、彼の有価証券にたいして²⁾ 銀行券を支払う。A はこの銀行券で B に満期手形の支払をし、B はその銀行券を³⁾ 同行に預金する。発券⁴⁾ はこれで終りとなるが、しかし貸付は残っている。（「貸付は残っているが、通貨〔currency〕は、もし必要がなければ、発行者のもとに帰っていく。」）⁵⁾ フラートン、97 ページ）同行が A に前貸したものは、資本ではなくて、銀行券であったが、同じ銀行券⁶⁾ がいま同行に帰ってきた。これに反して、同行は、⁷⁾ この銀行券で表現されている価値額だけの B への⁸⁾ 債務者であり、だから⁹⁾ B は、銀行の資本のうちのこの価値額に相当する部分を自由に使うことができる。それゆえ、同行の元帳の立場からすれば、取引は、同行が A に資本を前貸した、ということに落ちつくのである。¹⁰⁾しかし、この元帳の立場は、¹¹⁾ 取引の本性をいささかも変えるものではない。そしてその本性とは、A が必要としたものは資本ではなくて B への「支払手段」であったということ、発行された銀行券は支払手段として機能したということ、そして貨幣融通への圧迫は

けっして資本への需要ではなくて、支払手段への需要だということである。ただし、最後の場合に同行がその需要を満たすことができるのは、流通総量〔Circulationsmasse〕にそれだけの銀行券を追加することによってではなくて、同行が B にたいする一定価値額の債務者となることによって、つまり前貸が同行の資本の勘定にかかってくる、ということによってでしかないのではあるが。

- 1) 「第 1 に」——エンゲルス版でも強調されている。
- 2) 「彼の有価証券にたいして〔auf his securities〕」→「有価証券と引き換えに〔gegen Wertpapiere〕」
- 3) 挿入——「ふたたび」
- 4) 「発券〔issue〕」→「この銀行券の Zirkulation」
- 5) 「）（」——削除。
- 6) 「同行が A に前貸したものは、資本ではなくて、銀行券であったが、同じ銀行券」→「同行が A に前貸した銀行券」
- 7) 挿入——「A の、または A によって割引された手形の受取人の、債権者であり、」
- 8) 「への〔an〕」→「の〔von〕」
- 9) 挿入——「また」
- 10) ここからこのパラグラフの終りまでは削除されている。原文は次のとおりである。——Vom Standpunkt ihres ledger aus löst sich d. Transaction daher darin auf, dass sie d. A Capital vorgeschossen hat. Dieser ledger Standpunkt ändert aber nichts an d. Natur d. Transaction. Und dieser* ist, dass was A) brauchte nicht Capital war, sondern „Zahlungsmittel“ an B, dass d. ausgegebne Note als Zahlungsmittel functionirt hat u. dass d. pressure for pecuniary accommodation keineswegs demand for capital, sondern demand for means of payment ist, obgleich d. Bank im letztern Fall d. demand nicht befriedigen kann dadurch dass sie d. Circulationsmasse so viel Noten zufügt, sondern nur dadurch, dass sie zum Schuldner einer bestimmten Werthsumme an B wird, also d. Vroschuss auf Rechnung ihres Capitals kommt. 引用者が*を付した dieser は、diese であるべきところ（女性名詞の「本性〔Natur〕」を指すもの）と考えて、訳出した。
- 11) 〔手稿異文〕ここに、「現実の〔wirklich〔en〕〕」と書いたのち、消して

いる。

第2に¹⁾、AはBに支払い、そしてB自身か、またはさらにBから銀行券で支払を受けるCは、この銀行券で同行に、直接または間接に、満期手形の支払をする。この場合同行は、自分自身の銀行券で支払を受けた²⁾のである。だが、³⁾この場合には取引はこれで終わっている {⁴⁾Aから銀行への返済だけを除いて⁵⁾のだから、同行がなんらかの仕方で資本を前貸ししたと言うことはできない。同行は銀行券を発行し、それがAにとってはBへの支払手段として、Bにとっては同行への支払手段として役立ったのである。ただAにとってのみ資本 {これはここでは、事業に投下される価値額という意味においてである}が問題となるが、それは、彼がのちに自分の還流金を、したがって自分の資本の一部分を、同行に支払わなければならないというかぎりでのことである。この場合、彼がこれを金で返済するかそれとも銀行券で返済するかは、彼にとってまったくどうでもよいことである。というのは、彼は (銀行とは違って) なんらかの種類の商品資本を譲渡しなければならない、言い換えればなんらかの譲渡の受取金を銀行に支払わなければならないのであり、したがって金または銀行券を、516 それらの貨幣名に等しいなんらかの等価物と引き換えに受け取ったのだからである。彼にとっては、この金または銀行券は⁶⁾資本の価値表現なのである。⁷⁾

- 1) 「第2に」——エンゲルス版でも強調されている。
- 2) 「支払を受けた」——sich gezahlt hat → bezahlt wurde
- 3) 「だが、」——削除。
- 4) 「{ } および「 」」→「() および「 」」
- 5) エンゲルス版では、ここで文章が切られており、ここからこのパラグラフの終りまでは削除されている。途中で切られた文章を含めて、削除された原文は次のとおりである。——Da aber d. Transaction hiermit fertig ist [bis auf d. repayment d. A an d. Bank], kann nicht gesagt werden, dass sie in irgendeiner Art Capital vorgeschossen hat. Sie hat Noten aus-gegeben,

die dem A als Zahlungsmittel an B u. d. B als Zahlungsmittel an d. Bank dienen. Nur f. d. A handelt es sich soweit um Capital [diess hier in d. Sinn v. Werthsumme, d. in Geschäften angelegt ist] als er s. Returns später d. Bank zu zahlen hat, also einen Theil s. Capitals; wobei es ihm total Wurst ist, ob er diess in Gold od. Noten zurückzahlt, da er (im Unterschied v. d. Bank) Waarencapital irgend einer Art veräussern muss od. d. Einnahme irgend einer Veräusserung d. Bank zahlen muss, also d. Gold od. d. Noten f. ein ihr* Denomination gleiches Equivalent erhalten hat. Für ihn sind sie d. Werthausdruck v. Capital. 引用者が*を付した ihr は ihrer とあるべきところであろう。

6) [手稿異文] ここに、「現実の [realem]」と書いたのち、消している。

7) エンゲルス版ではここに、エンゲルスによるものであることを明記することなしに、1パラグラフをなす次の1文を挿入している。——

「では、銀行から A への前貸は、どの程度まで資本の前貸とみなされ、どの程度までたんなる支払手段の前貸と見なされるのか？」

エンゲルスはこの文に、次のような編集者注をつけている。——

「原文のなかのここに続く箇所は関連が理解できないので、括弧の終りまでは編者が新しく書き換えたものである。別の関連ではこの点にはすでに第 26 章でふれている。——F. エンゲルス」

エンゲルスによって、前出の比較的大きな 2つの部分を削除して「新しく書き換えられた [neu bearbeitet]」挿入は、次のとおりである。——

「{この問題は前貸そのものの性質にかかっている。これについては 3つの場合を検討する必要がある。

第 1 の場合。——A は銀行から前貸金額を彼の個人信用で、なにも担保を提供することなしに、受け取る。この場合には、彼は支払手段の前貸を受けただけではなく、無条件に新たな資本の前貸をも受けたのであって、返済するまではそれを自分の事業で追加資本として使用し増殖することができるのである。

第 2 の場合。——A は銀行に有価証券、すなわち国債や株式を担保に入れて、それと引き換えにたとえば時価の 3分の 2までの現金前貸を受け取った。この場合には、彼は自分が必要とする支払手段を受け取ったのではあるが、追加資本を受け取ったのではない。なぜならば、彼は自分が銀行から受け取ったよりも大きい資本価値を銀行に引き渡したからである。しかし、このより大きい資本価値は、一面では、それが利子を生むように一定の形態で投下されていたので彼の当面の必要——支払手段——のためには使えなかったのであり、ま

他面では A にはそれを売って直接に支払手段に換えなただけの理由があったのである。彼の有価証券は、とりわけ準備資本として機能するべき任務をもっていたのであって、このようなものとして彼はそれを機能させたのである。そこで、A と銀行とのあいだに一時的な相互的な資本移転が行なわれたのであり、したがって A は追加資本は受け取らなかったが(むしろ逆だ!)必要な支払手段を受け取ったのである。これに反して、銀行にとってはこの取引は貨幣資本を貸付金というかたちで一時的に固定すること、貨幣資本を1つの形態から別の形態に転換することだったのであって、この転換こそまさに銀行業務の本質的な機能なのである。

第3の場合。——A は銀行で手形を割引してもらい、そのかわりに、割引料を差し引いた金額を現金で受け取った。この場合には、彼は流動的でない形態にある貨幣資本を銀行に売って、そのかわりに流動的な形態にある価値額を受け取ったのである。つまり、まだ流動的でない形態にある貨幣資本を銀行に売って、そのかわりに現金を手に入れたのである。その手形は今では銀行の所有物である。このことは、支払が行なわれない場合には最終裏書人の A が銀行にたいしてその金額を保証するということによって、少しも変わらない。A はこの責任を他の裏書人たちや振出人と分担しているのであって、これらの人々にたいしては彼自身が求償権をもっているのである。だから、ここにあるのは、けっして前貸ではなく、まったく普通の売買である。それゆえ、A は銀行になにも返す必要はないのであり、銀行は満期日に手形の取立によって保証を受けるのである。この場合にも A と銀行とのあいだには相互的な資本移転が、しかも他のどの商品の売買の場合ともまったく同様に、行なわれたのであり、またそれだからこそ A はなにも追加資本を受け取っていないのである。彼が必要として受け取ったものは支払手段だったのであって、彼はそれを、銀行が彼のために彼の貨幣資本の一方の形態——手形——を他方の形態——貨幣——に転換させてくれたことによって、手に入れたのである。

こういうわけで、現実の資本前貸と言うことができるのは、ただ第1の場合だけである。第2と第3の場合には、せいぜい、どの資本投下でも「資本が前貸される」のだという意味でそう言えるだけである。この意味では銀行は A に貨幣資本を前貸するのであるが、しかし A にとってそれが貨幣資本であるのは、せいぜい、それが彼の資本一般の一部分であるという意味でのことでしかない。そして、彼がそれを要求し使用するのは、とくに資本としてではなく、とくに支払手段としてである。もしそうでなければ、支払手段を調達するために行なわれる普通の商品販売はすべて資本前貸を受けることとみなされなければならないであろう。——F. エンゲルス」

私営発券銀行¹⁾の場合には、次のような違い²⁾〔がある〕。すなわち、自行の銀行券が地方的 Circulation のなかにとどまっているのでもなく、また預金または満期手形の返済³⁾のかたちで同行自身に帰ってくるのではない場合には、同行は、同行の銀行券⁴⁾を手に入れた人々に、それと引き換えに金またはイングランド銀行券を返さ⁵⁾なければならない、ということである。⁶⁾ この場合には⁷⁾、同行にとっては、⁸⁾ 同行の銀行券の前貸は、事実上はイングランド銀行券の前貸を意味し、または、同行にとっては同じことであるが、金の前貸を、したがってその銀行の銀行業資本の前貸⁹⁾を表わしているのである。同様に、¹⁰⁾ イングランド銀行自身が——そしてこのことは、銀行券発行の最高限度を法定されているすべての銀行にあてはまるのであるが——¹¹⁾、同行自身の銀行券を Circulation から引き上げて次にふたたびそれを発行するために¹²⁾ ために公的有価証券¹³⁾を売却しなければならない場合には、同行にとっては、¹⁴⁾ いまや自身の銀行券が、同行の譲渡された¹⁵⁾ 銀行業資本の一部分を表わしているのである。

- 1) 「私営発券銀行」——Private banks of issue → Privatbank mit Notenausgabe
- 2) 挿入——「がある〔besteht〕」
- 3) 「返済」→「支払」
- 4) 「同行の銀行券」→「この銀行券」
- 5) 「返す〔retourniren〕」→「支払う」
- 6) 挿入——「こうして〔so〕、」
- 7) 「この場合には」——dann → in diesem Fall
- 8) 「同行にとっては、」——削除。
- 9) 「銀行業資本の前貸〔ihres Banking Capital[s〕〕」(ドイツ語は「銀行業資本の」であるが、この語のまゝに「前貸〔Vorschuss〕」という語が省かれているものと考えられる。) → 「銀行資本の一部分〔einen Teil ihres Bankkapitals〕」
- 10) 「同様に、」→「同じことは次のような場合についても言える。」
- 11) 「——そしてこのことは、銀行券発行の最高限度を法定されているすべての銀行にあてはまるのであるが——」→「またはそのほかの銀行でも銀行券発行の最高限度を法定されている銀行が」

- 12) 「発行するために」（原語は um ... zu vergehen と書かれているように見えるが、um ... zu verausgaben とでもあるべきところと見ておく。）→「前貸のかたちで発行するために〔um ... im Vorschüssen auszugeben〕」
- 13) 「公的有価証券〔public securities〕」→「有価証券〔Wertpapiere〕」
- 14) 「同行にとっては〔ihr〕、」——削除。
- 15) 「譲渡された〔veräußert〕」→「流動化された〔mobilisiert〕」

かりに Circulation が純粹に金属によるもの〔metallisch〕だとしても、同時に、1) 流出¹⁾ 2) が生じて金庫をからっぽにすることもありうるし、また、2) 金がおもに諸支払（過去の諸取引³⁾）の決済⁴⁾ のためにだけ銀行から要求されるので、銀行の有価証券担保前貸が非常に増大しても、それが預金のかたちで（⁵⁾ または満期手形の返済のかたちで⁵⁾ 銀行に帰ってくることもありうるであろう。その結果、一方の場合には〔einerseits〕⁶⁾ 銀行の総準備高⁷⁾ が減少し、他方の場合には〔andererseits〕銀行は、前には所有者としてもっていたのと同じ金額を今では預金者たちにたいする債務者⁸⁾ としてもっていることになり、⁹⁾ 結局は流通媒介物の総量¹⁰⁾ が減少するであろう。

- 1) 「流出」→「金流出」
- 2) 挿入——「（ここで金流出と言っているのは、明らかに、少なくとも一部分は外国に出て行くものことである。——F. エンゲルス）」
- 3) 挿入——「の清算」
- 4) 「諸支払（過去の諸取引）の決済」→「諸支払の決済（過去の諸取引の決済）」
- 5) 「（「および」）」——削除。
- 6) 挿入——「銀行の手持ちの〔im Portefeuille〕有価証券が増加するのにつれて、」
- 7) 〔手稿異文〕「総準備高〔Gesamtvorrath〕」←「準備高〔Vor[rath〕」
- 8) 「預金者たちにたいする債務者」→「預金者たちの債務者」
- 9) 挿入——「そして」
- 10) 〔手稿異文〕「総量」←「量」

これまで前提されていたことは、前貸は銀行券でなされ、したがって銀

行券発行の増加を、どんなに瞬過的なものである¹⁾としても、少なくとも一時的には、伴うということである。しかし、このことは必要ではない。銀行は²⁾、紙券のかわりに帳簿信用を与える³⁾こともできる。つまりこの場合には、同行の債務者⁴⁾が同行の仮想の預金者になるのである。彼は⁵⁾銀行あての小切手で支払い、⁶⁾小切手を受け取った人はそれで⁷⁾取引銀行業者に支払い、この銀行業者はそれを自分あての銀行小切手⁸⁾と交換する(①手形交換所)⁹⁾。このような場合には¹⁰⁾銀行券の介入はぜんぜん¹¹⁾〔生じ〕ないのであって、全取引は、銀行にとっては自分が応じなければならない請求権が自分自身の小切手¹²⁾で決済されて、銀行が受ける現実の補償は A にたいする信用請求権にあるということに限られる。この場合には、銀行は A に自分の銀行業資本¹³⁾——なぜなら自分自身の債権¹⁴⁾なのだから——の一部分を前貸ししたのである。

①〔注解〕手形交換所〔Clearing-House〕については、〔MEGA, II/4.2,〕470 ページ 41-42 行への注解を見よ。〔この注解は次のとおりである。——「ロンドンのロンバード通りにある手形交換所は 1775 年に設立された。これに属していたのはイングランド銀行とロンドンの最大級の銀行商会であった。この課題は、相互的な請求権を手形、小切手その他から差引決済することであった。」〕

- 1) 「どんなに瞬過的なものである〔noch so verschwindend〕」→「すぐにまた消え去る〔sofort wieder verschwindend〕」
- 2) 挿入——「A に」
- 3) 「与える」→「開設する」
- 4) 挿入——「である A」
- 5) 挿入——「自分の債務者に」
- 6) 挿入——「この」
- 7) 「それで〔damit〕」→「さらにそれを」
- 8) 「自分あての銀行小切手〔die〔checks〕d. Bank auf ihn〕」→「自分あての未決済小切手〔die auf ihn laufenden Schecks〕」
- 9) 「交換する(手形交換所)」→「手形交換所で交換する」
- 10) 〔手稿異文〕ここに、「……できない」と書いたのち、消している。
- 11) 挿入——「生じ〔stattfinden〕」

- 12) 「自分自身の小切手」→「自分自身あての小切手」
- 13) 「銀行業資本 [banking capital]」→「銀行資本」
- 14) 「自分自身の債権 [ihre eignen Schuldforderungen]」——「債権 [Schuldforderungen]」は「債務 [Schulden]」の誤記ではないかと思われる。

このような、貨幣融通を求める圧迫¹⁾が資本にたいする圧迫²⁾であるというかぎりでは、それが《そのようなもの》³⁾であるのは、ただ、銀行業資本⁴⁾、つまり銀行業者の立場から見ての資本にとって、すなわち、金（地金の流出の場合）⁵⁾、⁶⁾イングランド銀行券（国立銀行の銀行券）⁷⁾——これは私営銀行業者⁸⁾にとっては、ただなんらかの等価物で買われるだけの⁹⁾ものであり、したがって彼らの資本を¹⁰⁾表わしている——にとって、¹¹⁾最後に、金や銀行券を手に入れるために売りとばされなければならない公的 517 有価証券（国債証券やその他の利子付証券）にとってでしかない¹²⁾。⁽¹³⁾しかし、これらの有価証券は、それが国債証券であれば、それを買った人に「1334 上」¹⁾とってだけ資本なのであって、この人にとっては、彼の購入価格を表わし、彼がそれに投下した¹⁴⁾資本を表わしている。それ自体としては、それは資本ではなく、ただの債権である。もしそれが土地抵当証券¹⁵⁾であれば、それは将来の地代¹⁶⁾にたいするたんなる指図書であり、またもしその他の株式であれば、将来の剰余価値の受領を権利づけるたんなる所有証書である。すべてこれらのものは、¹⁷⁾資本ではなく、生産的¹⁸⁾資本のどんな構成部分をもなしてはいないのであって、じっさいそれ自体としてはどんな価値でもない。¹³⁾最後に、そのような¹⁹⁾取引によって、²⁰⁾銀行のものである貨幣等々²¹⁾が預金に転化し、その結果、銀行はその貨幣の所有者から²²⁾債務者になり、別の占有権限のもとにそれを保有するということもありうる。銀行自身にとってはこのことがいかに重要であるにせよ、それは国内に現存する資本の総量を、また貨幣資本の総量をさえも、いささかも変えるものではない。つまりこの場合、資本はただ貨幣資本として現われるだけであり、また、貨幣を除けば²³⁾、たんな

る資本権限として現われるのである。これは非常に重要なことである。と
いうのは、²⁴⁾ 銀行業資本へのそのような圧迫やそれにたいする需要と比
べてのその相対的な欠乏が²⁵⁾、実物資本〔real capital〕²⁶⁾の減少と混同
されるからであって、実物資本はこのような場合には、市場を供給過剰に
しているのである²⁷⁾。

- 1) 「貨幣融通を求める圧迫〔pressure for pecuniary accommodation〕」→
「貨幣融通にたいする需要〔Nachfrage nach Geldakkommodation〕」
- 2) 「資本にたいする圧迫〔pressure upon capital〕」→「資本にたいする需
要〔Nachfrage nach Kapital〕」
- 3) 「そのようなもの〔solches〕」→「こういうもの〔dies〕」
- 4) 「銀行業資本〔banking Capital〕」→「貨幣資本」
- 5) 「(地金の流出の場合)」→「——外国への金流出の場合——」
- 6) 挿入——「または」
- 7) 「イングランド銀行券(国立銀行の銀行券)」→「国立銀行の銀行券」
- 8) 「私営銀行業者」→「私営銀行」
- 9) 「ただなんらかの等価物で買われるだけの」→「ただなんらかの等価物と引
き換えに買うことによってしか手にはいらない」
- 10) 「彼らの資本を」→「彼らにとっては資本を」
- 11) 「にとって、」→「にとってでしかない。あるいは」
- 12) 「売りとばされ〔verklöpft werden〕なければならぬ公的有価証券(国
債証券やその他の利子付証券)にとってでしかない」→「売られ〔verkauft
werden〕なければならぬ利子付有価証券すなわち国債証券、株式、等々
が問題だとしてよう」
- 13) 「(」および「)」——削除。
- 14) 「投下した」——investiren → anlegen
- 15) 「土地抵当証券」——mortgages → Hypotheken
- 16) 「地代」——Rente → Bodenrente
- 17) 挿入——「現実の〔wirklich〕」
- 18) 「生産的」——削除。
- 19) 「そのような〔solcher〕」→「同じような〔ähnlich〕」
- 20) 「手稿異文」ここに、「銀行業の発行〔d. banking issues〕」と書いたの
ち、消している。
- 21) 「等々〔etc.〕」——削除。

- 22) 「から」→「でなく」
- 23) 「貨幣を除けば [mit Ausnahme v. Geld]」→「現実の貨幣形態で存在しない場合には」
- 24) ここに消し忘れの定冠詞 d. がある。
- 25) 「銀行業資本へのそのような圧迫やそれにたいする需要と比べてのその相対的な欠乏が [solche pressure upon banking capital u. its relative scarcity in respect to the demand for it]」→「銀行資本 [Bankkapital]の欠乏やそれにたいする切迫した需要が」
- 26) 「実物資本 [real capital]」→「現実資本 [wirkliches Kapital]」エンゲルス版では「現実」の部分が強調されている。
- 27) 「市場を供給過剰にしているのである」→「反対に, 生産手段や生産物の形態で過剰に存在していて市場を圧迫しているのである」

ところで、われわれは銀行の有価証券の増大（あるいは貨幣融通を求め
る圧迫の増大）と、それと同時に生じる通貨〔currency〕の総量の減少
ないし停滞とを、二重の仕方で説明した。¹⁾ すなわち、1) 地金の流出²⁾ に
よって、2) たんなる支払手段としての貨幣の³⁾ 需要によって。この第2
の場合には、その発行がただ一時的である⁴⁾ か、または帳簿信用のゆえ
に⁵⁾ 取引がまったく銀行券の発行なしに行なわれる⁶⁾ のであり、したがっ
て、《たんなる》信用取引が諸支払を媒介するのであって、また⁷⁾ これら
の支払の媒介⁸⁾ がこの貨幣取引⁹⁾ の唯一の目的なのである。貨幣がただ諸
支払の決済のためにのみ機能する場合には（そしてそのような恐慌のとき
に借りる¹⁰⁾ のは、支払うためであって買うためではなく、過去の諸取引
を終わらせる¹¹⁾ ためであって新たな諸取引を開始する¹²⁾ ためではない）、
その貨幣の Circulation はただ瞬過的〔*verschwindend*〕でしかないので
あって、この決済がまったく貨幣の介入なしにたんなる信用操作によっ
て行なわれるのではない場合¹³⁾ [でさえも] そうだということ、したがっ
て巨大な額のこのような取引と貨幣融通にたいする大きな圧迫とが¹⁴⁾
Circulation を拡大することなしに生じうるといふこと、これは貨幣の特
性である。しかし、フラートン、トゥック等々が持ち出している事実、す
なわち、¹⁵⁾ イングランド銀行が有価証券の膨張によって示されるような大

きな貨幣融通をしている¹⁶⁾ のに、それと一緒に¹⁷⁾ 同行の Circulation が停滞したままである¹⁸⁾ かまたは減少——低位の通貨〔a low currency〕——¹⁹⁾ しさえもするというたんなる事実は、一見して明らかに、けっして、彼らが彼らの誤った「資本の問題」のために主張しているのとは違って²⁰⁾、支払手段としての機能における貨幣《(銀行券)》の Circulation は増加も膨張²¹⁾ もしないということを証明するものではないのである。購買手段としての銀行券²²⁾ の Circulation は²³⁾ 減少するのだから、支払手段としての銀行券²⁴⁾ の Circulation は増加しうるし、また、Circulation の総額、すなわち購買手段プラス²⁵⁾ 支払〔518〕手段として機能する銀行券の合計は、²⁶⁾ 停滞した²⁷⁾ ままでありうるし、あるいは減少することさえも²⁸⁾ ありうる。²⁹⁾ 支払手段としての Circulation は、彼らにとっては³⁰⁾、Circulation ではないのである。

- 1) 「ところで、われわれは銀行の有価証券の増大（あるいは貨幣融通を求める圧迫の増大）と、それと同時に生じる通貨〔currency〕の総量の減少ないし停滞とを、二重の仕方でも説明した。」→「だから、流通手段の総量は不変であるかまたは減少するのに、どうして銀行が担保として保有する有価証券の量が増大することができるのか、つまり、銀行からの貨幣融通を求めて殺到する増加需要にどうして応じることができるのか、ということは、まったく簡単に説明がつくのである。しかも、この流通手段の総量はこのような貨幣欠乏の時期には二重の仕方でも制限されるのである。」
- 2) 「地金の流出」→「金流出」
- 3) 「の」→「への」
- 4) 「その発行がただ一時的である」→「発行された銀行券がすぐ還流する」
- 5) 「帳簿信用のゆえに〔bei bookcredit〕」→「帳簿信用によって〔vermittelt Buchkredit〕」
- 6) 「行なわれる〔stattfinden〕」→「進行する〔sich abwickeln〕」
- 7) 「また」——削除。
- 8) 「媒介」→「決済」
- 9) 「貨幣取引〔monetary transaction〕」→「取引」
- 10) 「そのような恐慌のときに借りる〔in solchen Crisen wird gepumpt〕」→「恐慌の時期に前貸を受ける」

- 11) 「諸取引を終らせる [Transaktionen abschliessen] → 「諸取引をかたづける [Geschäfte abwickeln]」
- 12) 「開始する」——beginnen → einleiten
- 13) 挿入——「でさえも [selbst]」
- 14) 「巨大な額のこのような取引と貨幣融通にたいする大きな圧迫とが」→「貨幣融通の要求が非常に勢いで押し寄せる場合にも、巨大な額のこのような取引が」
- 15) 「フラートン、トゥック等々が持ち出している事実、すなわち、」——削除。
- 16) 「有価証券の膨張によって示されるような大きな貨幣融通をしている [a large pecuniary accommodation, as indicated by the expansion of the securities]」→「巨額の [stark] 貨幣融通をしている」
- 17) 「と一緒に [zusammen mit]」→「と同時に [gleichzeitig mit]」
- 18) 「停滞したままである [stagnant bleiben]」→「動かない [stabil bleiben]」
- 19) 「——低位の通貨 [a low currency] ——」——削除。
- 20) 「彼らが彼らの誤った「資本の問題 [question of capital]」のために主張しているのとは違って」→「フラートン、トゥックその他の人々が(貨幣融通を貸付資本 [capital on loan] の借入れ、追加資本の借入れと同一視するという彼らの誤りの結果として) 推論しているのとは違って」
- 21) 「膨張する」——expandiren → ausdehnen
- 22) [手稿異文] 「銀行券」←「貨幣」
- 23) 挿入——「そのような巨額の融通が要求される不況期には」
- 24) 「銀行券の」——手稿では、ihr とあるべきところが、誤って sein となっている。(MEGA では ihr と訂正しているが、この訂正は訂正目録に記載されていない。)
- 25) 「プラス」→「および」
- 26) 挿入——「それにもかかわらず [dennoch],」
- 27) 「停滞した [stagnant]」→「動かない [stabil]」
- 28) [手稿異文] 「停滞したままでありうるし、あるいは減少することさえも」←「減少することが」
- 29) 挿入——「発行する銀行にすぐ還流してくる銀行券の」
- 30) 「彼らにとっては」→「これらの経済学者たちの見るところでは」

購買手段としての Circulation が減少するよりも高い程度で支払手段としての Circulation が増加するとすれば、たとえ¹⁾ 購買手段としての機

能における貨幣²⁾が量から見てかなり減少したとしても、総 Circulation は増大するであろう。そしてこのことは、恐慌中のある諸時点で現実に起こるのである。³⁾ フラートン等々⁴⁾は、支払手段としての銀行券の Circulation がこのような圧迫⁵⁾の時期の特徴だということを示さない⁶⁾ので、この現象を偶然的なものとして取り扱うのである。^①「銀行券を手に入れようとする激しい競争はパニックの時期を特徴づけるものであり、また、ときには、1825年の終りのように、地金の流出がまだ続いている時にさえも、一時的でしかないとはいえ突然の発券増加をひき起こすこともあるのであるが、ふたたびこのような競争の実例について言えば、私の考えるところでは、このような実例は低い為替相場の自然的な、あるいは必然的な付きものともみすべきではない。このような場合の需要は、Circulation〔 〕（購買手段としての Circulation と言うべきであろう）〔 〕のための需要ではなく、蓄蔵のための需要であり、流出が長く続いたあとに恐慌の終幕で一般的に生じる狼狽した銀行家や資本家の側からの需要⁷⁾であり、また、金の流出がやむことの前兆である。」a) /

①〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。

- 1) 〔手稿異文〕ここに、「本来の [……] としての貨幣が」と書いたのち、消している。
- 2) 「購買手段としての機能における貨幣」→「購買手段として機能する貨幣」
- 3) 挿入——「すなわち、それは信用が完全に崩壊してしまったときのことであって、そういうときには、商品や有価証券が売れなくなっているだけでなく手形も割引できなくなっていて、もはや現金支払または商人の言うキャッシュのほかにはなにも通用しないのである。」
- 4) 「フラートン等々」→「フラートンやその他の人々」
- 5) 「圧迫〔pressure〕」→「貨幣欠乏〔Geldnot〕」
- 6) 「示さない〔nicht beweisen〕」→「わからない〔nicht begreifen〕」（手稿での nicht beweisen は nicht bewuBt〔sind〕〔知らない〕とあるべきところかとも思われる。）
- 7) 挿入——「 」（つまり支払手段の準備としての）「 」（

【原注】 /334 下/ a) ¹⁾ フラートン, 130 ページ。

1) 「フラートン, 130 ページ。」——エンゲルス版では、上の引用のあとに括弧書きされている。

¹⁾ 第 4605 号。「(イングランド) 銀行がその利子率をさらに引き上げざるをえなくなったので、だれもが不安になっているようでした。地方銀行業者は手持ちの地金の額を増やし、また銀行券の保有額を増やしました。そして、平素はおそらく数百万ポンド・スターリングの金および銀行券を手持ちしているのを常としていた私たちの多くが、たちまち数千ポンド・スターリングを金庫や引出しのなかにしまいこみました。というのは、割引についても、われわれの手形が市場で流通できるかどうかについても、不安が広がっていたからで、これに続いて一般的な退蔵が起こったのです。」(商業的窮境, 1847-1848 年。)²⁾ このようなときに国立銀行にとって Circulation として現われるものは、中央から周辺への蓄蔵貨幣の拡散なのである。ロンドンの金貸し業者のうちの少しばかりの投機的頭脳は、このような時期に銀行券の人為的な欠乏をつくりだすのを常としている。

1) この原注の以下の部分は、すべて削除されている。ただし、最初の「商業的窮境, 1847-1848 年」から証言第 4605 号からの引用は、すでに草稿の 321 ページでも、雑録のなかで、「moneyed Capital の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響」という見出しをもつ諸引用の一部として抜萃されており、それがエンゲルス版の第 26 章 (MEW, Bd. 25, 432 ページ) に収められている。

2) このパラグラフの以下の部分の原文は、次のとおりである。——Was dann als Circulation erscheint f. d. Nationalbank ist d. Dispersion d. hoards vom Centrum nach d. Peripherie. Einige speculative Köpfe unter d. Londoner moneylenders pflegen in solchen Zeiten an artificial dearth of notes zu produciren.

「あるおりに、ある握り屋の老銀行家とその私室で、自分が向かっていた机のふたをあけて、1 人の友人に幾束かの銀行券を示しながら、非常に

うれしそうに言った。ここに60万ポンド・スターリングがあるが、これは金融を逼迫させるためにしまっておいたもので、今日の3時以後にはみな出してしまふのだ、と。この話は、……1839年の最低位のCirculationの月に実際にあったことなのである。」（〔ヘンリー・ロイ〕『為替相場の理論』、ロンドン、1864年、81ページ。）¹⁾

- 1) ヘンリー・ロイ『為替相場の理論』からのこの引用は、最後の文を除いて、第1部第3章第3節b「支払手段」のなかで、「このような瞬間が「商業の友〔amis du commerce〕」によって、どのように利用されるか」という例として引用されている（MEW, Bd.23, 152-153ページ、注101）。

②「資本〔 〕〔！〕〔 〕の供給は増加し、融通への需要は減少した。あらゆる非常事態に備えようといういつもの欲求——そしてこれが先週の終りに調査を促したものであったが——の結果、いつものように公衆は、実際に彼らが不足のために必要としているよりも大きな金額を確保しようと努力した。そして、自分自身の補充が十分になったにもかかわらず、彼らは喜んで預金から彼らの残高を引き出し、これを払い出すべき好機に賭けたのである。……¹⁾ 銀行券の欠乏を生じさせるために取られた手段について、ひどく奇妙なうわさがいくつか流れている。……なにかこの種のトリックが用いられたと想像することはどうかと思われるにしても、うわさは相当に広まっており、たしかに言及に値するものである。」（『ジ・オブザーバー』、4月24日）（1864年）

- ① 〔注解〕「ファンド——シティ——、4月23日、土曜日」。所収：『ジ・オブザーバー』、ロンドン、第3806号、1864年4月24日、4ページ第1欄。—マルクスがこの引用を、このまゝに挙げられている書物『為替相場の理論……』、236ページから取ったことは明らかである。
- ② 〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。
- 1) 以下の部分は、前パラグラフの『為替相場の理論』からの引用のあとに、「半ば政府機関紙である『ジ・オブザーバー』紙の1864年4月24日号は、次のように述べている」として引用されている。

第1653号。(S. ガーニ。ロンドンのビル・ブローカー)①「昨年〔 〕
(1847年)〔 〕10月に地方の仲間たちがわれわれの手に預金した貨幣を
求めて、国のあらゆる地域から、われわれにたいする全般的な需要があっ
た。」【原注終り】

- ①〔注解〕『商業的窮境……にかんする秘密委員会第1次報告書』, 1848年6月8日。「ロンドン・ノート, 1850-1853年」, 第7冊, から取られている。(MEGA, IV/8, S.263, Z.23-25.)

/334上/ 支払の連鎖が¹⁾ 中断されたときに、貨幣がそのたんに観念的な形態²⁾ から、諸商品に対立する、³⁾ 物的で同時に絶対的な形態に転変することは、^④すでに貨幣を考察したところで(支払手段の項目のもとで)⁴⁾ 519論じておいた。⁵⁾ この中断そのものは、信用の動揺やそれに伴う諸事情、すなわち供給過剰の市場⁶⁾ や商品の減価や生産の中断等々の、一部は結果であり、一部は原因である。

- ①〔注解〕カール・マルクス『経済学批判。第1分冊』, ベルリン, 1859年, 125-126ページ (MEGA, II/2, S.207/208).
- 1) 挿入——「急激に」
- 2) 「そのたんに観念的な形態 [seine bloß ideale Form]」→「たんに観念的な1形態 [eine bloß ideale Form]」
- 3) 挿入——「価値の」
- 4) 「貨幣を考察したところで(支払手段の項目のもとで)」→「支払手段としての貨幣を考察したところ(第1部第3章第3節b)で」
- 5) 挿入——「そのいくつかの実例も同じ箇所注100と101とであげておいた。」
- 6) 「供給過剰の市場 [overstocked markets]」→「市場の供給過剰 [Überführung der Märkte]」

フラトン等々¹⁾ が、「²⁾ 購買手段²⁾」としての貨幣と「³⁾ 支払手段³⁾」としての貨幣との区別を、「⁴⁾ 通貨 [currency]」⁴⁾ と「⁵⁾ 資本」⁵⁾ とのまがった区別に転化させていることはまったく明白である。その根底にはま

たしても「⁶⁾ Circulation」⁶⁾ についての銀行業者の偏狭な観念⁷⁾ があるのである。⁸⁾ |

- 1) 「等々 [etc.]」——削除。
- 2) 「「」および「」」——削除。
- 3) 「「」および「」」——削除。
- 4) 「「」および「」」——削除。
- 5) 「「」および「」」——削除。
- 6) 「「」および「」」——削除。
- 7) 「銀行業者の偏狭な観念 [d. engherzige banker's Vorstellung]」→「偏狭な銀行業者の観念 [die engherzige Bankiervorstellung]」
- 8) 挿入——「——」

519 / 335 上 / ¹⁾ 2) I) については,³⁾ さらに次のような疑問も起こるであろう。いったいこのような《逼迫⁴⁾ の》時期に足りないものはなにか、「⁵⁾ 資本」⁵⁾ なのか、それとも「⁶⁾ 支払手段」⁶⁾ としての規定性にある「⁷⁾ 貨幣」⁷⁾ なのか？ そして周知のように、これは1つの論争である。

- 1) [手稿異文] エンゲルスは鉛筆でページ欄外に、「334 ページの終わりへ」と書きつけている。
- 2) 草稿の 334 ページ上半の末尾の前パラグラフに続く草稿の 335 ページの上半では、「II. こんどは、銀行業者の資本がなにかから成っているかをもっと詳しく考察することが必要である」として、エンゲルス版の第 29 章に利用された部分が始まる。しかしマルクスは、そのあと 3 つのパラグラフを書いたのち、「I) については [ad I)], ……」として、挿入的な 3 パラグラフを書いている。この 3 パラグラフの左側には、インクで上下をやや右に折り曲げた縦線が引かれて、この 3 パラグラフがひとまとまりのものであることを明示している。ここで言う「I」は、エンゲルス版の第 28 章に利用された、草稿の 328 ページから始まる部分の第 2 パラグラフの最初に書かれている「I)」を指すものと考えられる（この点については、拙稿「『資本主義的生産における信用の役割』（『資本論』第 3 部第 27 章）の草稿について」、『経済志林』、第 52 卷第 3・4 号、1985 年、(27) - (28) ページを参照されたい）。そこでエンゲルスは、この記述を第 28 章の末尾に移したのである。本稿でも同じく、エンゲルス版の

第28章の末尾にあたるこの箇所収めておくことにする。

- 3) 「1」については、——削除。
- 4) 「逼迫」——pressure → Klemme
- 5) 「「」および「」」——削除。
- 6) 「「」および「」」——削除。
- 7) 「「」および「」」——削除。

まず第1に、逼迫¹⁾が「地金の流出」²⁾に現われるかぎりでは、要求されるものが国際的支払手段だということは明らかである。ところが、国際的支払手段としての規定性にある貨幣は、金属的現実性にある金、それ自身価値のある実体《⁽³⁾ 価値のかたまり》⁴⁾としての金である。それは同時に「⁽⁵⁾ 資本」⁵⁾であるが、しかし商品資本としてのではなく、貨幣資本としての資本であり、商品の形態にあるのではなく貨幣 ⁽⁶⁾しかもこの言葉のすぐれた意味での貨幣⁷⁾であって、この意味では貨幣は一般的な世界市場商品のかたちで存在する⁶⁾の形態にある資本である。ここでは、貨幣⁸⁾ ⁽⁹⁾支払手段としての⁹⁾にたいする需要と資本にたいする需要とのあいだには対立は存在しない¹⁰⁾。対立は、貨幣という形態にある資本と商品という 520 形態にある資本とのあいだにある。そして、資本がここで取られることを求められている、そしてそれが機能するために取らなければならない形態は、資本の貨幣形態なのである。

- 1) 「逼迫」——pressure → Klemme
- 2) 「地金の流出」→「金流出」
- 3) 「(」→「,」
- 4) 「)」——削除。
- 5) 「「」および「」」——削除。
- 6) 「{」および「}」→「(」および「)」
- 7) 【手稿異文】ここに、「}」と書いたのち、消している。
- 8) 【手稿異文】ここに、「および」と書いたのち、消している。
- 9) 「(」および「)」——削除。
- 10) 「存在しない」——existiren → vorliegen

こうした地金の¹⁾ 需要を度外視すれば、そのような逼迫期²⁾ にはなんらかの仕方で「資本」が不足している³⁾、と言うことはできない。{⁴⁾ 穀物騰貴、綿花飢饉、等々のような異常な事情のもとではそういうこともありうる。しかしそれは⁵⁾、けっしてこういう逼迫期の⁶⁾ 必然的な、または通例の付随現象⁷⁾ ではない。⁸⁾ それゆえまた、貨幣融通〔monetary accommodation〕にたいする圧迫が存在することからこのような資本欠乏の存在を結論することは、一見しただけでも⁹⁾ できないのである。}⁴⁾ 反対である。市場は供給過剰になっている。「商品資本」は市場にあふれている¹⁰⁾。だから、逼迫¹¹⁾ の原因は、とにかく「¹²⁾ 商品¹³⁾ 資本の欠乏¹²⁾」ではないのである。^①この問題には他の諸点を片付けたのちに¹⁴⁾ 立ち返る。|

① [注解] [MEGA, II/4.2,] 593-594 ページおよび 637-638 ページを見よ。

1) 「地金の〔von bullion〕」→「金(または銀)への」

2) 「逼迫期」→「恐慌期」

3) 「「資本」が不足している〔„Kapital“ ist deficient〕」→「資本が不足している〔es mangelt an Kapital〕」

4) 「{ } および 「 」」——削除。

5) 「それは」→「これらは」

6) 「こういう逼迫期の」→「そのような諸時期の」

7) 「必然的な、または通例の付随現象」——ein nothwendiger od. regular concomitant → notwendige oder regelmäßige Begleiter

8) [手稿異文] ここに、「{ }」と書いたのち、消している。

9) 「一見しただけでも〔prima facie〕」→「最初から〔von vornherein〕」

10) 「いる。「商品資本」は市場にあふれている〔„Waarencapital“ inundates the market〕」→「おり、商品資本であふれている〔mit Warenkapital überschwemmt〕」

11) 「逼迫」——pressure → Klemme

12) 「「 」 および 「 」」——削除。

13) 「商品」——エンゲルス版でも強調されている。

14) 「他の諸点を片付けたのちに」→「のちに」

(1993年11月20日)